
蒼き流星 大地の恵み

的中青矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き流星 大地の恵み

【Nコード】

N4067V

【作者名】

的中青矢

【あらすじ】

メテオGの一件から数ヶ月後の春、星河スバルとその仲間達は小学六年生へと進級し、平和な生活を送っていた。誰もがこのまま平穏な日々が続くと思っていた。そんなある日、スバルの前に騎士と、謎の少年が現れる。その2人から聞かされる新たな危機、それは異世界から来た電波体であった。そしてまたスバル達に新たな試練が訪れる。救われた少女と、救われなかった少年の、愛憎劇。今ここに始まる

O t h O n e h i g h s c h o o l g i r l (前書き)

どうも、的中青矢です。この作品についてまず少し説明をしたいと思います。

これは全作、「蒼き流星」の続編ではありますが、はっきりいつて前作を読まなくても大丈夫です。

『前作とは違う世界でのお話です』。

スバルのことについて一個だけ「原作との相違」がありますが、恐らくそれだけです。

なので前作を読んでいない方でも読めます。

逆に前作を読んだ方は「これはこう繋がっているんだ」というのを探してもらえれば面白いかと思います。

そして前作を読んだ方はその「直接の」続編に当たる「蒼き流星 希望への架け橋」もぜひごらんになってください

<http://ncode.syosetu.com/n4094v/>

では、御自分のペースで読んでください

タイトルの意味は「ある一人の女子高生」です

O t h O n e h i g h s c h o o l g i r l

「ねえ、あなたは何でこんなことをするの？」

恋焦がれていた相手だから口にするのは大変だと思っていたが、不思議と口は動いた。

季節は秋だったと思う。私もずいぶん昔のことだからあまり鮮明に覚えていない。そのときに見た紅葉がどうやって風に連れられていくかを、どんな風に夕陽が私たちを照らしていたのかは分からない。だけど、彼の横顔だけ今でも覚えている。

そのときの彼の顔は、一目見れば分かるとおり「面倒くさい」と語っていた。本当は照れてるだけじゃないの？　と思ったが口には出さない。彼はへそ曲がりなのだ。

「なんでか、ねえ」

眼下に見える街を見ながら、彼は呟いた。私の予想とは違って、彼は特に照れてる様子は無かった。あくまでも真剣な眼差しのままだ。

彼は変だと私は思う。彼と過ごしたこの半年間を振り返ってみると、よく分かる。ふらつと現れていきなり拾われて眠る場所が無かった私に寢床をくれた。さらに「独り立ちできるまではひつしよにいてやる」といわれ、気づいたらずっと一緒にいた。

彼の名前だって分からない。一応彼が名乗った名前で呼んでいるけど、本当にそれであっているのかは半年間では分からなかった。

「なんでか、って訊かれても特に答えられないよ」

「何で？」

「それについても『何で？』って訊くのか？」

私はその問いにニツコリと頷く。彼は数秒私をジト目で見つめて、それから溜め息をついた。よっしゃ、これで彼は折れた。しかし私は期待した返答をもらえなかった。

「答えが無いから、答えられないんだよ」

今度は私が溜め息をつく番だった。なんだそれ、理由が無いのにそんなことをするの？ そんなのおかしいじゃん。彼を責め立てるが、しかし答えは変わらない。

「別にいいじゃねえか。俺の気まぐれで」

「気まぐれで救われた身にもなってみてよ」

「運が良かったな」

「……そうじゃなくて」

全く、本当に変で勝手だ。だから私は彼の気持ち分からない。彼が本気で私に相手をしてきているのかも、彼が本性を見せたときがあるのかも、分からない。

「別におまえを救ったのが気まぐれでも、おまえが救われたことには代わりが無い。殺す気が無くても相手が死んじまったら相手は戻ってこない、それと同じ」

「酷い例えだね、それ」

悪かったな、と返す彼。しかし私にとってその応答は決して悪いものではなかった。何故なら会話こそが人間のコミュニケーションで、唯一彼と繋がるものだから。

「だから疑問に思っても仕方が無いだろ？ 救われたんだから」

本当に理由が無いのか、それきり彼はそのことについて何も言わなくなった。風に揺れる彼の髪が、頼りなさ気に見えた。

「……逆に質問だけど、おまえは俺に救われて良かったと思っているか？」

「……えっ？」

予想だになかった質問に、私は思わず訊きかえしてしまった。
『俺に救われて良かった？』

「だから、おまえは俺に救われて良かったと思っているのかって」
「……………」

取り方によつてはいろんな面を見せる質問だ。ここでの質問の解釈には二個があるために、私は少し考えなければいけなかった。

まず単純に助けられて良かったか、という質問だったらもちろんイエス。私は今生きていて本当に良かったと思う。

二つ目の解釈、「俺に」に助けられて良かったか、ということだが。

「どうした？ 何かちょっとおまえ目がきよるきよる動いてんぞ」

つまりは「俺によつて救われて良かったか？」という受け取り方だ。いや、もちろんイエスなんだけど、それを言うということはいささか気が引ける。

彼がどつちの意味で訊いてきたのかが分からない以上、迂闊にイエスとも言えない。どうすればいいのか、自分の顔が火照っているのを自覚しながら私は思案した。

いっそ訊いてみるか。

「ねえ、それどっちの意味で言ってるの？」

「……二つ意味無いだろ？」

詰みました。確実に詰みました。チエックメイト、王手、思いつくのがこれしかないのが残念だけどとにかくゲームは終了されました。

まずい、本当にどうしよう。どう答えればいいか分からない。ノーと答え辛いし、かといってイエスとも言えない。そんなジレンマを破ってくれたのは、意外にも彼だった。

「迷うならいいぜ？ 迷うくらい微妙なことだってことだろ？」

「へっ？」

我ながら素っ頓狂な声だな、と思いながら私は声を上げてしまった。しかし彼は構わず口を動かす。

「別に、俺が誰かを救ったからといってそいつが喜ぶかは分からないんだからさ」

そう口に出す彼のは落ち込み、唇も微かに震えているようだった。しかし目じりに光るものは見えない。

彼の訊きたいことがいまだ分からない私には彼に何と言ったらいいかわからなかった。しかしそれを考え出すよりも早く、彼は私とは反対方向に足を向けた。

これも彼の癖だ、さっきまで何をしているのかと思えばすぐどこかへと行こうとする。私も最初は彼に何度も置いていかれたものだ。しかし今ではさすがに置いてかるはずがない。

「来るな」

そう彼が言うまでは、私は本気で彼に置いてかれるとは心の片隅にすらなかった。だけど、現実には心にはないものを私に突きつけた。

「もう、ついて来るな」

先ほどから彼が放つ言葉の数々は理解不能だったが、それは頭で認識することも叶わなかった。雷に打たれた、と表現すればいいのか、それとも私自身がそのとき固まってしまったのかは分からない。ただと言えることは、彼はそのまま私を置いてどこかへと行ってしまったということだ。

呆然としている私に彼が最後に見せたのは、その寂しげで軟い彼自身の背中だった。

なんてことを思い出すのはいいが、しかしあれから四年経っても彼から音沙汰は無い。せめて記憶だけでも彼と一緒にいたら、という淡い願望が私に回想させたのだ。高校一年生にもなって、小学六年生のころの恋にすぎるなどなんて馬鹿なのだろう、と思う。しかし無理矢理に思い出されるのだ。

「はあ……」

時刻は7時半、そろそろ登校の時間だ。女の子らしく髪を整えようとブラシで髪をとかす。しかし彼女の髪はもともと肩までしかなく、とかすのに一分もかからなかった。

彼女は親元から離れて暮らしはじめ10年、うち5年を孤児院のような場所で過ごし、それから彼に惹かれ、残った四年半を自力で生き抜いてきた。たった一人の少女がそれを実行するのがどれほど

困難なことか。ゆえに彼女は同世代の人間よりも人間性や生活能力は高かった。

髪をとかし終わった私はとうに着替え終わっており、あとは学校に向かうだけ。しかし私はテレビの電源を点け、それを見始めた。このままだと学校に遅刻することになる。ウェーブライナーで30分もかかる学校に通っているために、テレビなど見ている余裕がない。だがお構いなしにテレビのニュースを見る。

画面に映るのはどこかにある山の麓。一目でフジ山だと分かった。そして他に映っているのサテラポリス二ホン支部と、青い人間を囲む人の輪だ。

「へえ、そういえば今日だっけ」

我ながら高い声を響かせながら窓の向こう側に見える紅い星に目を向ける。たしか、WAXAの話ではあの星のコアを壊すらしい。それが失敗すれば紅い星、メテオGに地球はやられて今の文明が滅びるのだとか。

それもあり私が通っている学校以外は閉鎖、おそらく今街にいる人間なんて誰一人としていることは無いと思う。みんながみんな、地球の命運をかけた大勝負に目を向けている。

しかしそれはばかばかしいと思う。滅びるときは滅びるのだから、いつも通り過ごせばいいのに。

『……学校とやらにはいかないのか？』

右腕にある水色のハンターから、私のウィザードが出す低い声で訊いてきた。このウィザード。元はただの電波体。とも結構長い付き合いで、もし文明が滅びるなら彼とも別れてしまっただろう。

『今日は『コーチョー』とやらが決めた方針で行かなければならな

いのだろう?』

「そうだけど別にいいよ。面倒くさい」

私はテレビから目を離さずに答える。最近の若者はテレビの見すぎだ、と言われている時代が200年続いているがその恩恵を私も受け継いでいる。

「世界が滅びるかもしれないと思っていたら腹痛が発症して行けませんでした、っていいばいいのよ」

『……貴様はそれでいいと思っているのか?』『コーチョー』というのは貴様が尽くす相手であろう?』

「ああ、尽くすとかそんなじゃないから。ただ権力が強いだけの奴に、何で私が尽くさなきゃいけないのよ」

その返答にいささか不満げそうだったが、けど特に抗議をしてくれなかった。たぶん『我とは違う世界観を持っているのだな』とか何とか考えているに違いない。気難しそうな顔をして案外考えは単調だったりする。

『……まあよい。だが貴様は何を見ている?』

「世紀の一瞬、かな?」

笑いながら答える私には、世界が滅びることへの恐怖はない。だって結局は救われてしまうんだから、どんな世界も。今テレビに映っている青い電波人間が負けようとも、きっとまた彼なら救ってくれる。

『たしか、前回はあいつは来た。だが今回は来るとは限らんぞ?』
「もしヒーローが負けるようなことがあれば来るよ」

ハンターの住人に溜息を疲れた。それも盛大な。一体何がおかしいんだろっ、と思いながら目を向けるとさも知ったようにウィザードは言ったのだ。

『期待しているのか？ また英雄が負けるのを』

その質問に私は数秒無言でいたが、すぐにニツと笑ってあげた。全くなんてこんなにも言われたくないことをいつてくれるのだろうか。ウィザードは確か高性能な電波体なはずなのに乙女心も分からないとは。

「期待しているよ？ だってそうじゃなきゃ来てくれないもん」

『…… 前は突然来たから今回も来るとは限らんと何回言えがいいのだ？ 我が主人^{オペレーター}ながら呆れ果ててしまう』

「いつもでしょ？」

何故彼が私にこんな騎士の鏡みたいな電波体をくれたかは分からない。けど一つ言えることは、私とウィザードには共通項があるということ。

『…… 悪いが奴がもし現れるようなことがあれば私はどんなところへも向かうぞ？』

「メテオGって、ウィザードじゃ無理でしょ？」

『奴がいるならどこへでも行く。おまえが奴のオペレーターをどう思っているかが知らないが、あいつだけは私に譲れ』

今度は私が溜息をつく番だ。冷静そうで堅物、よくクールな顔に秘められた熱い心、なんて漫画なんかのキャラで見るけど、実際横にいるとただうざいだけだということを認識させられる。

『いいな？』

「ご勝手に。私もそっちには用はないよ」

『ならいい。あいつが現れ次第私は急行する。「ガッコー」であるところであろうと、見つけ次第すぐにだ』

「分かったから、ちょっと黙ってて」

テレビではもう世界の期待を背負ったちっぽけなヒーローがメテオGへと向かうところだ。正直、負けて欲しい。死んで欲しいとまでは言わなくても彼が来るなら軽い怪我くらい負って欲しい。

だって、何であのとき急に去っていったか知りたいもん。

でもきつとこのヒーローは勝ってしまうんだろうな、って思っちゃう。だって目が違う。結構前にどこかのスキー場で現れたって二ユースがやってたときの映像よりも、明確な意志が宿っているみたい。本気で勝つぞ、ってのが画面越しからでも分かる。

「どうなるんだろう、この世界は」

そんな私のどうでもいい呟きと同時に、ちっぽけな勇者は紅い流星へ飛んでいった。けどここから先の戦いはテレビじゃ見れない。私も特に行く気はないし。

「じゃあ、学校行こうか」

『……結局行くのか？』

「うん、やることないし」

もう一度溜息をウイザードを尻目に、私は靴を履いて外に出た。やっぱり街は閑散としている。だから好都合、ウェーブライナーなんか無かったって登校時間には間に合っちゃう。

「じゃあ、頼みますよ？」

『……我を無駄に使うな』

「いいじゃんいいじゃん今日くらい。体動かさないと負けちゃうよ？」

その言葉に反応してウィザードは体をビクリとさせる。効果観面、やっぱり単純だ。

『……好きなように仕え』

「そう？　じゃあ使わせてもらいますよ？」

ハンターの中からアイテムという欄を選ぶ。本当だったここにはいろんな写真とかが入っているんだけど、私の場合はこちらと違う。そのたった一つのアイテムだけで容量が一杯になっちゃう。

「では行きましょう。」

電波変換CF

水城明菜 みずしろあきな

オンエア！

O t h O n e h i g h s c h o o l g i r l (後書き)

感想お待ちしております。ユーザーの方でなくても感想がかけますのでよろしくお願いします！

1st The spring vacation ends soon(前書)

タイトルは「春休みはもうすぐ終わる」です

「明日からまた学校か……なんだか哀しくなるな」

はぁ、と溜め息をつきながら大柄な少年が横にいるトサ力頭へと話しかける。太陽が真上を過ぎていることから時間は1時くらいだろうか。時間帯としては一番暑いことから大柄な少年 牛島ゴンタは汗を掻き始めている。

「そうだね、ゴンタ。……でもそれって、君が宿題をまだ終わらせていないからじゃないの？」

「そ、そんなことはないぞスバル。俺はちゃんと委員長の言ったとおりにやり遂げた！」

本当に？ とゴンタの横でスバルと呼ばれた少年が苦笑する。どうやら彼はゴンタが宿題を終わらせたとは思っていないらしい。

今日は春休み最終日、進級する児童は2週間という短い休みの間に宿題を課される。一部の児童は今日初めて宿題に手をつけるというものもあるかもしれない。そんな日に小学六年生2人は悠々と歩いていた。

この2人のツーショットというのは珍しい。彼らがいるならば白金ルナや最小院キザマロといった親友もいるのが普通なのだ。だが今日は見当たらぬ。

「……まあいいけど。今日徹夜しようとも。暁さんのお見舞いを遅らせるわけにもいかないし」

今日の夕方頃に親友4人組は暁シドウ メテオGの一件で重体を追ってしまった人の見舞いに行く予定なのだ。しかし何も持って

いけないのもどうかということなので彼ら2人は今からお見舞いの品を買いに行くというわけなのだ。

本当であつたらルナやキザマ口も来る予定だったのだが、前者は生徒会長の仕事を抜け出せず、後者はどうしても行かなければ行けない用事があるとのこと。この2人だけで行くことになった。そのことに対してルナは

「あなたたち2人で本当に大丈夫なの!？」

と叫んでいた。だがルナが心配しているのはスバルではない。ゴンタのほうである。彼の発想は牛井しかない。見舞いの品? 牛井でも買っておけという感じである。しかしお見舞いの品で牛井が喜ばれることなどあまりないだろう。

何とか僕がするから、というスバルの説得とともに2人はスピカモールへとようやくやってきたのだ。しかし一向に決まる気配が無い。さつきから明日から学校だよしよしと2人で話していたのだ。諦めの悪い2人だ。

「とにかくさつきと決めちゃおうよ4時にはWAXAにいなきやいけないんだし」

「だけどさ、お見舞いの品って何を選べばいいんだよ」

「さつきからフルーツバスケットっていつてるじゃん」

「だけど高いじゃん……」

どうやらゴンタは見舞いの品は安く済ませたいらしい。何で?

とスバルが訊いたところ牛井クエストの最新作が出るからだそう。そんな理由でけちけちしないでよと呟いたスバルにゴンタは

「分かった! 俺が牛井クエストを買ってそれを曉さんに貸せばいいんだ!」

なんてことを言い出す始末である。スバルは頭を痛めてしまった。実に可哀想な子である。

「うーん、じゃあどうしよう……」

安くておいしいもの、そして暁が好むもの。そんなものがこの世に存在するのだろうか？ とスバルは考える。考えながらスピカモールを歩いているとスバルの目に駄菓子屋という文字が映った。

「あつ……」

「ん、どうしたスバル？」

遅れてゴンタもスバルが向いている方向へと目を向ける。そこには爛々と輝く駄菓子屋の文字。そして2人は同じ発想へと辿りついた。

「……うまい棒！」

ドンガラガツシャーン！ と雷にでも打たれたかのような感覚を覚える。暁シドウの大好物、うまい棒。1本10ゼニーのスナック菓子でありしかもおいしい。スバルたちが探していたものにとつてこれほど適しているものはないだろう。

「なんで僕はこんな簡単なことに気づかなかつたんだろう……」

「ああ、今も俺それを考えている……。くそつ暁さんに悪いぜ。俺たちはあの人の何を見てきたんだ」

悲観的になりつつあるがお見舞いの品は見つけた。なら今すぐにも買うべきだ。ここでじっとしていても何も起こらない。

「じゃあ、行こうかスバル」

「うん、行こうゴンタ」

そういつて2人は駄菓子屋の仲へと入っていた。セリフだけ聞けばラスボスに突っ込んでいく勇者2人だが、実際入っていったのはただの駄菓子屋である。どこにもラスボスらしきドラゴンやサタンは現れない。

意気揚々と駄菓子屋にスバルたちが入ると店はがらんとすいていた。客は着ていなかったらしい。そっちのほう为好都合かとスバルは考えお求めの品を目で探した。

「……あつた」

まるで伝説の聖剣を見つけたかのような雰囲気と言うが2人だが見つけたのは棒状のスナック菓子である。断じてその袋を開けると光り輝く黄金の剣が現れるわけが無い。強く握り締めると碎けて食べるのが面倒になるスナック菓子だ。

うまい棒はとりやすいようにと置かれたのか箱詰めになって床におかれていた。品揃えがいいらしく種類はざっと見て20を超えていた。

「……どれを買おうか」

「うん、僕もそれを考えてた」

これだけの種類があれば何を買いえばいいか分からなくなってしまふ。全部1本ずつ買えばいいじゃないかと考える人もいるが嫌いな味も人にはある。それを含めてしまつと何を何本買おうかという話になるわけだ。

「やっぱり、チーズは譲れないよね」

そういつてスバルはチーズ味を買い物カゴへ5本入れた。

「ならピザ味も入れる必要があるだろ」

ゴンタが今度はピザ味を十数本無造作に入れる。どんだけピザ味がすきなんだと突っ込まれてしまいそうだ。

「ゴンタ、こんなにピザ味はいらなと思うよ……？ それをそんなにいれるならメンタイ味だって必要だよ」

スバルは驚づかみにしたうまい棒をカゴに入れる。何だか数えるのが面倒くさくなってくる。

「それならコンポタージュ味も必要に決まっている！ スバル、おまえを俺は見損なっただぜ……」

コンポタージュ味がカゴに入る。いつしかカゴはうまい棒だけで一杯になりそうだった。元々駄菓子やには大きなものなどない。何故ここまでうまい棒に異常な執着を見せるのかというと、以前お見舞いにいったときにシドウに何本か薦められていたのだ。その際に「これだ！」と思う味がいくつかあつたらしく以来2人は「もしうまい棒を食べるならこれだろ！」というものが決まったのだ。

「タコヤキ味も必要だと思うんだ！」

「エビマヨチーズを入れるよ！」

「だったらチョコレート味も」

「チキンカレーだろそこは！」

ぎゃあぎゃあわめく2人。うまい棒は2人を虜にしてしまったようだ。他の世界では考えられない光景である、全く。

と、そこで駄菓子屋に新たなる客が入ってきた。ぴたりと2人は喚くのをやめる。どうやらさすがに他人の前で子供っぽく喧嘩するのは恥だと思ったようだ。さつきから老婆店主がこちらを冷たい目で見ているのを知っているのに。

入ってきたのはスバルとゴンタがどこかで見たことのある顔だった。銀髪に小学生にしてはやや高い身長、そしていつも闘争心をあふれ出している瞳。瞬間的に2人はコダマ小学校の児童だと思い出したが名前までは思い出せなかった。

けれど銀髪の少年は2人を知っているようで、すぐに口から名前を出した。

「あれ、星河スバルと、牛島ゴンタ……？」

「え、何で僕たちのことを……？」

そんなスバルの問いに銀髪の少年は苦笑しながら答えた。

「いやさ、そりゃ知っているよ。おまえたちって結構有名だぜ？」

あの高飛車生徒会長の腰ぎんちゃくってことで」

「た、高飛車……？」

「腰ぎんちゃく……？」

思わず首を傾げる2人。しかしそれに構わず少年は続ける。

「それに一時期星河はあのロックマンって噂もあったからな。名前と顔くらい覚えちまう」

あのメテオGの一件のあと、スバルはロックマンではないかという噂で学校中がもちきりになった。そのころのスバルはというと結

構いろいろ質問攻めにされたりといろいろ大変で、早くこんな生活が終わって欲しいと願っていた。

だがその生活は急に呆気なく終わった。原因はというと「こんなもやしっ子がロックマンのはずがない」という説からだ。そう、どこからどう見てもスバルにはあの英雄ロックマンになる材料がないと判断されたのだ。だからスバルをロックマンだと思っている人間はコダマ小学校では数少ない。

「あ、はははは、そうだったねたしかに」

本当にロックマンだとこの少年には知られてはいけないとスバルは愛想笑いに徹する。

「っていつか、おまえ誰だ？」

「ッ！ ゴンタ……」

さっきまで黙っていたゴンタが急に質問した。スバルは内心冷や汗状態だった。「おまえ誰だ？」なんて失礼なことを言ってしまうのはさすがに駄目だろうと考えたのだろう。しかしゴンタはそれに対し特に悪びれた様子は見せない。

「あ、そうかそうか。おまえたちは俺のことを知らなかったんだ」

けれどあくまで少年は笑ったままだった。特に気にする様子も無い。そんな細かいことなどどうでもいいとばかりに。

「苗字はカイ、名前はハヤテっていう。よろしくスバルとゴンタ」

「こ、こちらこそ……」

「……………」

おずおずとしたスバルと黙ったままのゴンタ。だがそれを見てもカイは笑ったままだった。

「それにしてもおまえら……なんでそんなにうまい棒買ってるんだ？」

「そ、それは……お見舞いの品だから」
「お、お見舞い……？」

「？」を頭の上に数十個浮かべ、それを反芻し、何度も唱えたあとカイはどうしたかというところ。

「はははっはっは！ お見舞いの品！？ おまえらどういう神経してるの？ うまい棒がお見舞いの品って失礼とか通り過ぎてギャグかよー！」

スバルとゴンタの喚き声よりも大きな声でカイは笑う。心なしか涙も出ている。どうやらつぼにはまってしまったらしい。

「いやいや、おまえら面白いわ。出来れば当たらしクラスとはおまえらとがいい」

まだ笑いながら、けれどしつかりと2人を見つめながらカイは言う。心底楽しいと言わんばかりに。

「ま、おまえらの神経はちょっとどうかと思うけどな」
「……そんなに笑わなくてもいいじゃん」

「いや面白いよ星河。なかなかそれを選ぶセンスを持っている奴はいねえ……。案外おまえ面白い奴になるかもな」

ただの馬鹿になるかもしれないけど、とさらに笑うカイ。どうや

らカイはよく笑う人間のようだ。というか笑いすぎである。

『カイ、そろそろ時間だぞ？ 早く菓子買って帰ろうぜ？』

「おつ、そうだなゲイル。悪い」

姿の無いものからの声、それを聞いてカイのウィザードかなとスバルは思う。ゲイルというのがおそらくそのウィザードの名前なのだろう。

カイはすぐに目当てのものをカゴへと入れて会計を済ませてしまった。それから2人にもう一度顔を向け

「じゃあな2人とも。明日学校で会おう」

そういつて駄菓子屋から去っていつてしまった。その背中を最後まで、ゴンタは視界に捉えていた。まるで怨敵を見るような目で。

「……ゆるさねえ」

「えっ？」

スバルはゴンタの言葉を聞き取ることが出来なかった。ゴンタも言う気が無かった。だからスバルは「腹減ったとでもいったのかな？」と思いその続きを考えるのをやめた。

「さて、と。ゴンタ、これくらいでもういいよね？ 結構買ったし」

数えてみると50本近くある。こんくらいあるのはさすがに邪魔かな？ でも前にダンボールにうまい棒敷き詰めてあったのを見たからな、と自問自答しながらゴンタに聞く。しかし返事は無い。

（……何かあったのかな？）

しかしさっきのカイとの会話でひっかかるようなことは特に無かった。だから何も無いはずだとスバルは考える。

それからすぐさま会計を済ませ　お代はあとで4人で割り勘となっている　2人は駄菓子屋から外へと出た。まだゴンタの期限が何故悪いかが分からないスバルであつたが問題はないと考えていた。おそらくまだうまい棒のことを根に持っているに違いないと考えたのだ。

ハンターを見てみるとメールで「響ミソラ、単独ライブ！」と書かれたメールが着信されていた。そういえば今日ミソラちゃんのライブあつたのか、見に行きたかつたな～と思いながらメールをよく見てみると添付ファイルがあつた。

「えーっと、これは何だろう？」

そう思いながらひらいてみるとどうやらライブの録画ビデオらしい。わざわざこんなのが配信されるとはさすがミソラちゃんと思うスバル。しかしすぐにその動画を停止させた。

「…………あれ？」

スバルがとめたのは何もミソラの絶好の表情を拝み倒したいからではなかった。彼の視線は観客へと注がれている。そう、観客へと

「なんで、キザマロ、こんなところにいるの……………!？」

1st The spring vacation ends soon (後書)

では、感想まってまゝす

2nd It returned in daily life . (前書き)

意味：日常は戻ってきた

2nd It returned in daily life .

「……すいません、遅れまして。みなさんなんでこちらを睨んでいるんですかっ!？」

夕方のWAXA、そこでは暁シドウのお見舞いに今キザマロが到着した。他のスバル、ゴンタ、ルナはもう30分前には到着しているにもかかわらずだ。

「……キザマロ、何で今日はこんなに遅れたの？」

ルナの冷たい視線がキザマロに突き刺さる。昼ごろ見たビデオをスバルとゴンタはルナに見せていた。裏切りかもしれないと思ったが、実際裏切ったのはキザマロである、と結論を出し密告したのだ。

「え……だから用事があったん」

「おい、一体何を話しているんだ？」

ふいに暁の声が病室に響いた。部屋は個室で、さらにスバルたちのような小学生には分からない医療器具がそこに存在していた。余程の重体の人間でなければこんなにも必要にはならないだろう。

あのとき、ジョーカーの爆発に巻き込まれた暁は重体で発見された。決死の救命活動によって意識を取り戻したのがつい一ヶ月前。それまで暁はスバルたちには死亡したと伝えられたためいろいろとショックだった。みんな泣いて喜んで見舞いに行ったのが逆にシドウの傷に触つてすぐに退室。それが前回の見舞いだった。

だから今回は前回のようにはいかないぞ、と思っていたのがどうやら一人のせいで台無しになってしまったようだ。

「……いえ、何でもありませんわ」

せつかくの見舞いで悪い話をルナは聞かせたくは無かった。ちょっとこっちに来なさい、と無理矢理にキザマ口と退室する。ちよつとそれはゴリ押しすぎないか、とスバルは思ったがそんなこと怪我人の前で言いたくなかった。

でも、なんでキザマ口はミソラちゃんのライブに一人で行ったんだろうと考える。けれどさっきから何時間も考えているのだ。今更答えが出るわけではなかった。

「どうしたんだルナとキザマ口は？ 2人してトイレか？」

「そ、そうだよキット！ 2人とも便秘気味なんだよ。本当に困っちゃまうよな、あっはっはっはっは」

ルナと同じようにゴンタも無理矢理に繋げる。不自然というか何だか怪しい人みたいだ。

「……2人とも、大変なんだな」

暁もスバルとゴンタの挙動不審が心に引っかかりながらも言及はしなかった。してはいけない雰囲気をも2人が醸し出して、冷や汗も掻いていたからだ。けれど2人は気づかれなかったことに露骨に安堵してしまう。

それを横目で見ながら暁はスバルとゴンタから貰ったうまい棒9本目を取り出す。昔に一度廃止されたピザ味だ。これがなかなか食べられないんだよな、袋をぺろりと開けて啜く。それからサクサクサクサクサクと軽快な音共にうまい棒が減っていく。驚異的なスピードだ。

「また、こいつを食べられるなんて思っではいなかったな……」

『なぐにしょぼくれた顔しているんだ暁。らしくねえぞ』

その声が聞こえるのはスバルのハンターからだ。次に瞬間にはもうその声の主はウィザード・オンしていた。

蒼いボディと真紅の瞳、全てを切り裂いてしまいかねない鋭利な爪、そして乱暴な言葉遣い。そんな四拍子が揃っているウィザードなどこの世に1体しかない。

「ウォーロック、そんなこと言っちゃ駄目だよ」

『ああ？　だつてよ、生きているのにまるで死んじまったみたいに言うんだぜ？』

それが生き残った奴のセリフかよ、彼は呟く。どうやら彼なりに暁を励ましているつもりらしい。けれど死ぬか死なないかの境目をさまよった人に言う言葉ではない気がする。

「ははは、たしかにそうかもな」

暁はウォーロックの言葉を否定しなかった

「けど少しだけ違うぜウォーロック。別に俺はしょぼくれちゃあいない」

『おまえ、自分の顔を一度でも見たことあるか？　大分ふけたように見えるぜ』

「老けとらんわ！　まだぴっちぴちのふさふさだ！」

老けた、という言葉に暁は反応した。皺で来たのか？　とゴンタが追い討ちをかける。しょぼくれた顔ではなく暁は泣き顔になりつつあった。

「……とにかくだ。俺はふけてもしょぼくてもいないぞみんな。髪も抜けていない!」

『……何かあつたんだな?』

「何もないわ!」

大声で叫ぶ暁にスバルは身体は大丈夫なのかと思ってしまう。今も服の内側に包帯が巻かれているのがかすかに見えるのだ。つまり傷はまだ治っていない。傷が開いてしまわないかとひやひやしているのだ。

「……いいか。俺はしょぼくتهはいない。ただ、な。こううまく棒とかを食べていたりおまえらを見ていると思うんだ。ああ、帰ってきたんだなって」

「……ッ」

その言葉にスバルやウォーロツは呑んでしまった。その暁の言葉の重みを知って、感じ取って。

暁にとつてはほんの一ヶ月前にようやくメテオGの一件が「終わった」のだ。彼が意識を取り戻すと共に。キングとの因縁が幕を下ろしたのだ。

「うまい棒を食って、おまえらと喋って、そんな生活が出来るってことは世界は平和になったんだなって実感するんだよ。……死にそうになったからこんなこと思つかは分からないけどさ、とにかく思うんだ」

「暁さん……」

戦いは終わり、世界は平和になった。これでようやく暁も日常へとまた戻っていく。電波変換は身体に負担をかりすぎるためにもうするなと長官から言われたらしいけれど、それでも彼は生きてい

る。サテラポリスの仕事は他にもたくさんある。

「ん？　なんでスバルは泣きそうなんだ？」

「……ゴンタ、空気を読もうよ」

『ブロロロ、俺にもさっぱりだったぜ』

次にワイザード・オンしたのは赤いワイザードだった。一目見ればそれが牛だということに気づく。直角に曲がる角がそう照明している。

『オックス……この俺でさえ空気を読んでいるんだ。ってか狭い部屋におまえみたいな熱い奴が出てくるんじゃない？　　暁の身体に影響が出たらどうする！』

『だったらおまえもハンターに戻ったらどうだ？　おまえみたいな野郎がいると暁もうざったくて仕方がねえと思うがな』

『んだとこの牛肉野郎！　焼肉にして食っちゃおうか！？』

『脳筋野郎は黙ってるお！』

『なんていったあ！？　今すぐ表に出ろ！　ぶちのめしてやる！！』
『いいぞウォーロック、ブロロロ……！』

何故かワイザード2体はここに来て戦おうとしているらしい。どれだけ血気盛んなだろう。きつと人生は死ぬまでではなく魂が燃え尽きるまでだ！　などと思っているに違いない。あほか。

「ちょっと、2人とも静かにしようよ。今日は暁さんのお見舞いだよ？」

『『外なら問題ねえ！（ブロロロ）』』

さっきは暁の心配を口にしていたのによくそんなことがいえるなとスバルは呆れ半分感心半分だった。けれどこのまま野獣2体を野

放しにしておくつもりはないらしい。それについてはゴンタも同じだ。

「「ウィザード・オフ」」

その言葉と共に2体のウィザードは各々のハンターへと転送されてしまう。200年前の人間がこれを見たら魔法だと思うかもしれない。

「すみません、暁さん」

「いや、元気なことはいいいことだよ。逆におまえらの元気の無さを心配してしまうよ」

苦笑しながらそういう暁。さっきまでの暗い表情はもう無かった。

「ま、とにかく俺もこれからを考えていくさ。戦えないから警察やめる、ってわけじゃないしな」

「そんなこといわないくださいよ。僕達は、またいつか一緒に戦えますよ」

「そつだぜ暁さん！ 身体なんてすぐに治るぜ」

「……戦いになる世界はもう嫌だろ？」

あつ、と口をそろえる2人。その間抜け顔を見て再度暁は笑った。けれどすぐに表情を消してしまう。

「……そういえば、ルナとキザマロはどうしたんだ？」

だがスバルとゴンタはその問いに黙り込んでしまう。「暁さんのお見舞いがあるのにキザマロだけ抜け駆けしてミソラちゃんのライブに行っていましたなんていえるわけが無い」

「ま、まだトイレにいるんじゃないかな？ きつとそうだよ」

「あいつらのほうが、実は俺よりも重症なんじゃないのか？」

「そ、そうかもしれないね。ぼ、僕心配なんで様子見てきます」

スバルはすぐにルナとキザマロに戻るよう言うつもりだった。このまましらを切りとおすのは難しいと感じたのだ。

ドアノブに手をかけようとドアに歩み寄る。そして手をかけようとしたその瞬間、がちやりとドアがひらいた。

当然ながらそのドアはスバルへと直撃、ゴンという生々しい音が部屋に響いた。鶏にドア、とはよくいったものだ。ちなみに鶏とはスバルの頭を指していて、もう一つ注釈するとそんなことわざはない。

「あつ、ごめんなさい」

部屋の外から聞こえる女の子の声、一瞬誰？ とスバルはおでこをさすりながら思う。ルナやキザマロの声とはまた違っていた。しかしそんな人がここに来るだろうか？

部屋の中へと入ってきた人は意外にも見知った顔だった。というか三時間前にも少しだけ見ていた。赤い髪にエメラルドグリーンをした瞳、国民的アイドルとして知られた顔、

「やつほー、スバル君たち元気？」

響ミソラはいつもテレビの前と同じようにスバルたちに笑顔を向けていた。

「っていうかスバル君大丈夫？ ドアにぶつかったから相当痛いとおもうんだけど……」

「み、ミソラちゃん！？ どうしてここに？」

ゴンタが裏返った声でそう叫んだ。余程驚いているのか目もかつと見開かれている。ゴンタはドがつくほどのミソラファンなのだ。仕方ないのかもしれない。

「え、聞いてないの？」

「聞いてないって？」

「ふふふふ、それは僕から話させてもらいますよスバル君」

見ればルナとキザマロも病室に入ってきた。個室といってもそこまで広いわけではない。五人も見舞い客がいればそれこそ蒸し風呂状態だ。けれど最新鋭のエアコンが空気を涼しくしてしまう。

「ミソラちゃんは、僕が呼んだんですよ」

「キザマロが？」

キメ顔で語りだすキザマロにスバルは聞いた。

「はい、そうです。なにやら誤解されていたようですが、僕はライブまでいってミソラちゃんに暁さんのお見舞いに誘ったのですよ」

「……直接言いに？」

「ええ、ミソラちゃんは今日ライブ。メールを送ってもきつと伝えるわけがないと思いましてね……」

これ以上ないくらいのドヤ顔でキザマロは語る。それほどミソラをここに連れてきたのが功績だと思っているのだろう。たしかに功績なのだがそこまでドヤ顔でいわれると何だかむかつくものである。

「けどキザマロ、よくライブのチケット取れたな。今日ぎりぎり取

れたのか？」

「ふっ、何を言っているんですかゴンタ君。委員長がお見舞いを決めたのも今日、けれど僕はライブのチケットはとっくの昔から取っていたのですよ」

な、なんだって！？ 俺はとれなかったって言うのにか？ と驚愕の声を上げるゴンタ。どうやら彼も行きたかったらしいがチケットは取れなかったらしい。

「本当に、キザマロくんには助かったよ。私今日はぎりぎり時間取れてさ。今日逃したら晁さんが退院しちゃうかもしれないし」
「いえいえミソラちゃん、礼にも及びません。紳士としては当然のことです」

国民的アイドルがただのがり勉少年にお礼を言うシチュエーション、きつと中々に遭遇することは無いだろう、うん。

「……スバル君、ゴンタ」

突然今まで黙っていたルナが声を出した。それも、結構押し殺しているのが分かる。

「あなたたち、私を騙したわね……！？」

「ひいつ、い、委員長それは違う！ だって見ただろあの動画。あれを見たらキザマロが抜け駆けしたと思うじゃんか！」

「いいわけうるさいゴンタ。私によくも恥をかかせたわね！」

わーわーきゃーきゃーと騒がしくなる病室。ルナの怒号とスバルとゴンタの叫び、ミソラがそれをとめようとするが止まらない。いろいろと混沌としていた。

『シドウ……これがあなたの日常になるんですね』

暁のハンターから彼の相棒・アシッドがそういう。

「……ああ、平和な世界であいつらと俺は過ごすんだろうな」

『嬉しいですね。……ウォーロックはいりませんが』

「そんなこというなよ。それにおまえも死に掛けているんだぞ？」

『ウィザードは復元できます。問題はあなたのほうです』

そうだな、という暁。けれど傷を負ったことに彼は後悔していない。何故なら彼は守れたから。この世界と、子供達のキズナを。

「いいんだよ、これで」

自分に言い聞かせるように、暁は言う。そして願う。もう、この世界で戦いが起こらぬようにと……。

《緊急事態発生 緊急事態発生 謎の電波体がWAXAを襲撃 緊急事態発生 緊急事態発生 謎の電波体がWAXAを襲撃》

それは突然WAXAで鳴り響いた。平和を壊してしまうもの、戦いを呼び起こすもの、誰もが望んでいないもの。

かくして、彼らはまた戦いに巻き込まれることになる。世界を渡り歩いた少年の、尻拭いをする形で。

2nd It returned in daily life・(後書き)

かんそうまつてまーす

3 r d a b o y w a s h i t (前書き)

意識：少年は殴られた

3 r d a b o y w a s h i t

サテラポリスからのメールによると、どうやら謎の電波体は高速でWAXAの中を移動しているらしい。サテラポリスとWAXAが共同で追っても追いつけないくらいに。RWウォール リアルウエーブの防御へ木をぶち破ったほどの力の持ち主だと聞かされた後では、それも特に驚きもなかった。

それを知ったスバル、ミソラ、ゴンタは各々で謎の電波体を探すことにし、一旦別れた。もし敵が見つかった場合すぐに知らせると約束をし。

そしてスバルは今WAXAの中を駆け回っている。探しは初めてもう10分だが見つかる気配も無い。周波数が感じ取れないのだ。

(……この感じ)

謎の電波体、その周波数がない、そしてRWシールドを破るほどの実力者、スバルはある一つの結論にたどり着いていた。

『……なあ、スバル。謎の電波体って』

「うん、その可能性は充分にあると思う」

ハンターの中にいる相棒にスバルは頷いた。それから自分が緊張していることを心臓の音で理解しながらも冷静にWAXAを走る。

「謎の電波体は、僕たちの恩人かもしれない」

ムー大陸の一件でのことだ。あのときスバルは世界の命運を賭けてラ・ムーと戦うことになった。全ての思い、キズナを背中に背負い、彼は最後の最後まで戦い抜き、『負けた』。

そう、このスバルはあの人にラ・ムーに敗北したのだ。負けるつもりはなかった。手を抜いたわけではない。そんなことはスバルはしない。ただ運が悪くて負けただけなのだ。

そしてそのまま世界はオリヒメの手によって支配されてしまうと、スバルは意識を朦朧とさせながら思っていた。

だが、事実は違った。

颯爽とどこから現れた電波体がスバルと世界を救ったのだ。それも、圧倒的な強さで。

薄めのスバルでも分かったのはその電波体の色が銀色なのと、風を操るということ、そして何故か周波数がないだけ。それ以外には何も分からなかった。どんな顔をしているのかも、性別はどちらなのかも。

だがスバルにとってはそんなことはどうでもよかった。ただ自分を救い、世界も救ってくれた。その事実だけが嬉しくて、感謝の意で胸が一杯になった。

しかしその電波体は現れたときと同じようにすぐにどこかへと消えていった。お礼もいえないまま。まるで世界から消えてしまったかのように。

「もしかしたら、また来たのかも知れない……どんな理由で来たのかは分からないけど」

その銀色の電波体がどんな目的を持っているのかは分からない。

ラ・ムーを圧倒的強さで倒したことから世界を救いたいと思っていることは間違いないと思う。しかし、ただの気まぐれかもしれない。

「でも、もし今回の電波体があの人なら」

『お礼をいいたってか。全くおまえらしい』

「ウォーロックは違うの？」

『あのときはあんな奴がいなくても俺が倒せた！』

ウォーロックらしいね、そういつてスバルは苦笑した。

「とにかく、今回の電波体があの人ならお礼はきちつと言おう。… WAXAを攻撃したのだって、きつとわけがあると思うし」

『そんなの決まっているわけじゃねえぜ？　今回は世界を潰そうと考えているのかもしれない』

「そんなわけないよ。それだったらオリヒメが世界を支配してからラ・ムーを倒せばいいじゃないか」

『かもしれないえ。けどなスバル。今回の襲撃者があいつだとは限らないんだ！　浮ついた心でいると、また前みたいにやられるぞ！？』

そう、まだ襲撃者がどんな姿をしているのかもどんな目的を持っているのかも分からない。ここで気を緩めていてはウォーロックの言うとおりまた負けてしまう。

「……分かった。とにかく敵を見つけよう」

生憎まだ誰からの連絡も無い。アシッドもまた敵を発見しようとしているはずなのだが、そのアシッドでさえも見つけられない敵普通に考えて有り得ない。

電波体というのは常に周波数を放っている。つまりWAXA内全域でサテラポリスに登録されていない周波数を見つければいい話なのだ。

「……おかしい」

まさかもう逃げたのでは？　と思ったスバルだが送ったメールの返事は簡潔に「それは有り得ない」ということだった。WAXAか

ら外に出たらカメラによって視認される。

だったらWAXA内にもカメラはあるのではないか、という疑問が上がるがカメラはある。そして視覚もない「はずだ」。

『おいおい、敵はびびりなんじゃねえのか？』

「……何か時を待っているのかも」

『高速で移動ついても絶対に見えるだろ？ って、メール

が来たぞ！ ミソラからだ』

すぐにスバルはその場で停止、メールをすぐに開ける。

「……建物の、上!？」

『はあっ、屋上つてことか？』

「……違うと思う。屋上なんていない……多分、この建物の一番上にいるってことだ」

死角、カメラは建物の中と侵入される可能性のある場所しか設置されていない。建物の『上』なんて、設置する意味がないのだ。

「つまり、家で表わしたら屋根の上にいるってことだ……なんでこんなところに」

『わけがわからねえぞ……』

わざわざWAXAに奇襲をかけた理由がよもやWAXAの『屋根』に上りたかったというわけではあるまい。

「……僕たちを誘っている？」

有り得ないはずではない。屋内は狭い、しかし『屋根』は天井や壁などが無い分戦いやすくはあるはずだ。

「ミソラちゃんが敵を見つけたのは、故意ってこと……?」

『おい、それじゃあやべえぞ! RWシールドを1人でぶち破る敵にミソラじゃ敵わない!』

「と、とにかく急ごう!」

WAXAの『屋根』と表現される場所にスバルは急いで向かったが、時間が遅かった。

見ればそこにはミソラと、メールを見て駆けつけたであろうゴンの姿があった。しかしどちらも白い『屋根』に倒れ伏せていて、立ち上がる気配を見せない。

「ふ、2人とも!」

慌てて2人のもとへ駆け寄る。電波変換は解けてしまっているが、どうやら2人の命に別状はないらしい。……ところどころに落ちている真っ赤な液体が落ちているから死んでしまっているようにスバルには見えた。

「なんで、2人が……?」

ミソラ1人ならともかく、ゴンタもいて負けるとは思えない。恐らくミソラが倒された後にゴンタが来て、ゴンタも敗北したということだろう。

『……スバル、とにかく敵を見つけろ。話はそれからだ』

「でも、2人の傷が」

『いいか、ここで放っておいても死ぬわけじゃねえ。致命傷がねえのは明らかだ。それよりも、敵を倒すほうが』

ウォーロックの言葉が止まったのを聞いてスバルは疑問に思ったが、すぐに原因を知る。

間一髪のところでは敵の攻撃を避けるスバル、さっきまで彼がいたところには、一発の銃弾が着弾する。チュイン、と映画でおなじみの音がスバルの耳を揺さぶる。

銃弾がやってきた方向を見ると、そこには1人の「少年」がいた。風貌はそれこそ普通の少年だ。茶髪にあどけなさの残る顔、身長はスバルと同じ程度、服は今にもスピカモールに出かけられるくらいにラフなものだ。

「おお、避けたのか。さっすが英雄」

口笛でも吹きそうな声で少年は笑いながらそういった。その笑顔はここにはあまりにも不釣り合いだ。

「……誰？」

「ところでさ英雄、君ってシルバー・ウィンドって知ってる？」

突如そんなことを訊く少年、スバルの質問は見事なまでにスルーだ。

「……聞いたことないけど」

「じゃあ見たことは？」

「そんなのあるわけないじゃん。大体どんな人なのか」

不意に蘇るのはラ・ムーのときにみた1人の電波体の姿、銀色と風が吹き荒れる感覚。

シルバーウィンド。銀色と、風。

「思い出したな？ そいつがシルバー・ウィンドだ」

「……その人がどうしたの？」

「いや、特に。あくまで確認」

そのシルバー・ウィンドという名前には本当に意味もないようで、それから少年はその名をここで呼ぶことは無かった。

「それよりも、君誰？」

「そういや自己紹介はまだだったな。俺は光烈斗^{ひかりれつと}っていうんだ」

まるで初めて同じクラスになった人への自己紹介みたいにいる彼の眼は、笑っていないかった。何故かは分かっている。スバルが敵であり、スバルも烈斗のことを敵だと認識しているからだ。

「……てめえ、なんでこんなことをした！」

「ん？ そりやおまえたちと戦うためさ」

「……なんで僕たちと戦うの？」

「そんなの決まっているじゃないか」

烈斗はあくまで笑顔のままスバルに歩み寄ったかと思うと

「君がうざいからだよ」

一気にスバルの目の前へと移動していた。

呼吸する間もないとはこのことだろう。事実スバルとウォーロックは攻撃されるまで烈斗が目の前まで移動していることを認識できずにいた。

烈斗の脚が『屋根』を踏み鳴らすのと同時に、彼の拳がスバルの腹へとめり込む。その一連の動作は素人ではなく、どうやら何かの拳術をならっているようだった。

「え……」

痛みを認識する前に体が浮いていることに気付いた。体が吹っ飛ばされて壁にぶつかったことを認識する前に痛みに気付いた。ぶつかった痛みを認識する前に壁にぶつかったことに気付いた。

「がはつぐふっ……ああ……！」

叫び声も出ない。それほどまでに烈斗の一撃は速く、強く、隙が無かった。

「な、なんでただの人間に……！？」

「電波体なら分かるだろ？ 俺がただの人間？ おいおいそれは間違いだよ」

「なっ……」

改めて周波数を探すウォーロック、すぐにそれは見つかった。

「こいつ……人間の姿のままの電波体！？」

「そ、それって本当ウォーロック！？」

「嘘いうわけねえだろ！ こいつは本当に電波体だ！」

町に出れば普通の少年と映るであろう烈斗、しかし実は電波体……？ 意味が分からなかった。スバルはこれまでこの少年とウィザー

ドが電波変換してそこから戦いだと思っていた。だから油断もしていた。けれど実際は違う。最初から、烈斗は電波人間だったのだ。

「ってかおい、そのまま寝ているのか？ おまえらここでデリート

される気？」

スバルと烈斗の距離は約15メートル、しかしさつきもその距離はあったのだ。それを一瞬で縮めスバルを一撃で瀕死においやるほどの攻撃を見舞う。

派手さなど無い。端から見ればただ思い切り殴ったというだけの話。きっとスバルがクリムゾンドラゴンと戦ったときの100分の1にも満たない攻撃だ。

「別にこのまま殴り殺されてもいいんだぜ？」

「……殺されてたまるもんか！」

膝が力に入りにくい、しかしだからなんだというのだ。それが殺される理由になるなんて馬鹿すぎる。

「君の目的が僕を倒すことなら、僕は受けてたつ」

「……いいね。最高だよ英雄　開戦だ」

3 r d a b o y w a s h i t (後書き)

感想待ってます！

4th a boy is very strong.

「……で、どう倒すんだ？」

「……分らない」

ウォーロックの問いにスバルは答えることが出来なかった。何せ「謎の電波体」だ。姿は人間、それでいて電波体、どう対処すればいいかなんて彼に分かるわけがなかった。

「……まあ作戦なんてなくていい。だけどスバル、相手の姿が人間だろうと手加減はするなよ」

そう、今回の問題は敵が人間の姿あるということだ。これでは倒していい存在なのか一瞬判断にかける。今まで守る存在であった人間を、この手で倒す。

「……ミソラちゃんとゴンタを倒した敵なんだ。手加減はしないよ」

少しの動揺を隠せずに、スバルは形だけ頷いた。

「おいおい、作戦とか考えているのか？」

烈斗があきれたように訊いてきた。もちろん答える2人ではない。もちろん烈斗は親切に答えてくれるとは思っていなかった。ただ拳を強く握り締め

「作戦を実行される前に潰すのが定石、ってね」

その場から一瞬で姿を消した。

今度こそスバルは烈斗の移動の早さに瞠目する。その地面を蹴る脚力が、その殺意を込める瞳が、スバルの知っている『人間』という概念から外れた存在である。

だが今度は黙って殴られるつもりはない。すぐに左手にあるハンターを操作し、バトルカードを使用する。

「バトルカード スーパーバリア！」

敵の攻撃を5回防ぐことが出来る黄色いバリア、それが瞬時にスバルの体を包み込む。

スバルがスーパーバリアを使ったことに一瞬目を細くした烈斗、しかし問題ないと考えたのだろう。そのままスバルをバリアごと殴ろうと突っ込んでくる。

「^{がんかい}岩塊」

みなさんは八極拳というのをご存知であろうか？ チョイナで最も強力な拳術と目されている、超接近戦専門の拳法だ。

その高威力と引き換えに敵の眼前まで迫らなければいけないという欠点があるが、それに有り余る威力を誇る。

しかし高威力といっても近づかなければいけないのだから、攻撃を当てる前に負けてしまうかもしれない。なのでほとんどの使い手は他の拳法も併用することが多い。

だが、烈斗は他の拳法を併用することはない。何故なら彼の移動速度は、敵の眼前までほぼ一步で迫ってしまうのだから。

烈斗が握り締めた右拳を前へと突き出す。それと同時に右脚で踏み込む。ダンツ、と『屋根』が鳴り響く。

右拳と右脚を出したので拳を一気に前方へと飛ばすことが出来る。そしてその「踏み込み」「助走」の威力で上乗せされた拳が、ま

つすぐにバリアへと向かっていく。

ばりん、というガラスが割れたような音をスバルは耳にした。けれど烈斗の拳がバリアを破った、ということに気付くのが遅れた。スーパバリアは攻撃を5回防ぐ、だが烈斗の拳は一撃だけだ。

『スバル、避ける！』

ウォーロックのその言葉にスバルはハツとなる。烈斗はバリアを破り、二の手、三の手をもう講じている。左手を猫の手のように指を固め、それを一気にスバルのほうへと『押し出す』。

「^{とつた}倒陀」

「くっ……！」

間一髪でスバルは後方へとジャンプした。烈斗の左手が、あと数センチのところで止まってしまふ。どうしても踏み込みをしようとする

時間がかかる為になかったのだ。逆にいえば、左足を出してさえいれば今の一撃は命中していた。

だがまだ烈斗の攻撃は終わらない。腕で駄目なら脚で、リーチの長い脚を駆使し今度は右脚でスバルの頭を割ろうとする。

「なっ……でもっ」

しかしこの攻撃もスバルは距離を取るによって避けた。無理な体勢からの攻撃と、元々連携して出せるわけではなかったということが失敗に導いたのだ。

攻撃がやんでもスバルは思い切り距離を取る。その距離20メートル。人間相手に取る距離ではない。だが烈斗はもはや人間ではな

いのだ。これくらいとってこの世界のスバルは丁度いい。

「……なんだ今の」

『あいつ、ありえねえぞ！？ 電波人間ってのは人間の数倍の筋力を持っているんだ！ それと互角、それ以上をあいつは持っているぞ！？』

「落ち着いて、ウォーロック。あの子は人間じゃないんでしょ？」

そう、姿が人間というだけで中身は電波人間だ。そのせいで判断が鈍くなる。

（それにしても、あの攻撃…… 僕が戦ってきた電波体よりも強い？）

スーパーバリアが一撃で壊された、バリアが拳を弾けずに、貫かれてしまったのだろう。普通なら5回防げても、貫通されては意味が無い。

『おい、これはこっちから仕掛けるしか勝ち目はねえぞ！？ さっきはバリアで防いでからのカウンターってのが出来たかもしれないがな』

そう、スバルはそれを狙っていたのだ。バリアで攻撃を防ぎ、敵の作った一瞬の隙を重たい一撃で倒す気だった。

「だけど、あの子はそれすらもさせてくれない……！」

何か特殊な能力を使ったわけでもない、何か強そうな武器を振るったわけでもない、彼が使ったのは彼自身の小さな拳だ。たったそれだけなのだ。なのにスバルはそれを恐れなくてはいけなくなる。

『……遠距離からの攻撃は？』

「あの高速移動で狙い撃てる？」

撃てるわけがない。そもそも撃つ前にやられる。銃口を烈斗へと向けた瞬間に、勝負は決してしまうのだ。

「……だから僕らも接近戦で勝負するしかない」

『なっ……正気か！？』

「それしかない。じゃないと僕たちはあの子に傷一つ負わせられない」

今烈斗は20メートルというこの大きな距離をどう縮めようか計っているようだった。さつきから拳を構えたまま動く気配を見せない。どうやらスバルが動いてから烈斗も動く気のようにだ。

「バトルカード ファイアスラッシュ！」

右腕が炎の煌剣に変わる。それを見て烈斗は眉をひそめた。どうやら接近戦で挑んでくることを意外に思っているらしい。

「いくよ、ウォーロック」

その言葉とともにスバルは一気に烈斗のほうへと飛び込んで行く。だがそれだけでは烈斗の攻撃をただ喰らいに行くだけだ。

そう、それだけでは。

『ウォーロックアタック！』

一気にウォーロックアタックによってスバルは烈斗の目の前まで移動する。烈斗は今まさにカウンターを狙っていたようで、出鼻を

くじかれる形になった。

「……ッ」

だが烈斗はあくまで少しだけ舌打ちをするだけだった。まるで手のかかる子供に泣かれてしまったかのような感じ、烈斗にとってスバルの決死の行動はそれくらいの重みしかなかったのだ。

しかし烈斗に鎧など攻撃を防ぐ物はない。つまりこのまま剣で斬られれば重傷を負うことになる。

「そこだっ！」

隙を作った烈斗へとスバルはまっすぐに剣を振るった。確実に防ぐことの出来ない一撃、これで勝負は貰ったと、勝手にスバルは勝負を決しようとしていた。だがしかし、その攻撃を烈斗は軽々と避けてしまう。

それを追う形で剣を振るう。右、左、上、下、荒れ狂う攻撃を、だが烈斗には当たる気配が無い。

「……えいつ！」

けれどチャンスが無いわけではない。一瞬の、これは絶対に避けられないだろうという縦の一閃。烈斗が避けようとしたその方向へと、それは振り下ろされる。

勝てた、スバルは思った。これで戦況は変わる。ウォーロックが思った。

その2人の思いを、烈斗は変えた。

振るわれた剣が、止まった。それは、烈斗の手によって。

「え……っ？」

ファイアスラッシュ、その側面を烈斗は掴んでいた。痛覚が鈍いのか、それともないのか、特に痛みを感じている様子は無い。じじじと焼けるような臭いがスバルの鼻につく。

「で、これがおまえの力？」

ばかり、と烈斗はファイアスラッシュを『へし折った』。なんの苦勞もせず、ただ木の枝を折るかのように、へし折った。

「おいおい、これはないだろ。剣捌きはシルバー・ウィンド キリュウの足元っていうか世界から違っっていうか。なんだろうね、とにかくおまえは論外だ」

気付いたらスバルはまた烈斗の一撃を喰らっていた。今度は胸に両拳を当てられていた。

「爆雷^{ばくぐわい}」

それは胸で爆発しかたのような威力だった。ただの拳でスバルの胸からバゴツという音が聞こえたかと思うと、スバルは地面に倒れていた。厳密に言えば20メートル後方へと吹っ飛ばされて。

「てつきりもう少し強いと思っていたよ……これじゃあれだな。明菜にも勝てねえよ。弱すぎ、せつかく……まあいいや。どうせすぐ死ぬような存在だし」

溜め息を吐きながら烈斗はスバルへと近づいていく。ゆつたりと、勝利という二文字を現実にさせるため。

『ビーストスイング!』

「だからそんなの無駄だって」

烈斗はそんなウォーロックに対し、あくまでも冷静に、沈着に、完全に、無欠の勝利をするために構えた。

「^{かけつ}華月」

烈斗の肘うちが、ウォーロックへと決まる。その威力に言葉も出ない。静かになったウォーロックはその体を『屋根』へと沈めた。

「うお……ウォーロック!？」

ようやく意識を取り戻したのか、スバルは倒れたウォーロックのもとへと駆け寄ろうとする。だが烈斗の攻撃を受けすぎたせいか、まともに力など入らない。

「あれ？ 意識は取り戻したのか？ 戦線からの復帰は早い、か。だからつておまえが弱いことには変わらないけど」

「……きみ、は、一体、なん、なん、だ？」

「しいていうなら……そうだな、しがない電波体だよ」

遂に烈斗はスバルの目の前までたどり着いた。けれどスバルはその場から動くことも出来ない。万策、尽きてしまった。

「さようなら英雄、いい夢見てな」

それはサッカーボールを蹴るかのような動作、八極拳なんて関係の無いただの蹴り、それがスバルの顎を打ち抜いた。

意識を失う数瞬、スバルは哀れな子供を見るかのような、烈斗の顔を見た気がした。

4 t h a b o y i s v e r y s t r o n g . (後書き)

感想プ
リ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ズ
(壊れた

ま
じ
で
誰
で
も
か
け
ま
す
ぜ

5th Violent aura (前書き)

荒々しいオーラ

5th Violent aura

「……ッ」

スバルが眼を醒ましたら、視界にはただ真っ白な何かした映らなかった。彼は一瞬、ここは死後の世界なのだろうか？ と考えそうになる。身体感覚がない、指や足も動かない。ふうわと浮いているというイメージだろうか。魂だけが違う場所にあるみたいだ。

「……ここは？」

「WAXAの病院よ」

「え……」

すると視界に白い髪をした老婆が入ってくる。その暖かなまなざしと、赤いフレームの眼鏡には見覚えがあった。

「ヨイリー博士」

「お久しぶりスバル君。身体調子はどう？」

「……なんで倒れているんですか、僕」

病院のベッドで寝かされていることはどうにかスバルにも理解できた。身体感覚がないのはおそらく麻酔が効いているからだろう。

「覚えていないの？ WAXAに奇襲してきた敵に、スバル君とゴンタ君、ミソラちゃんは負けてしまったのよ」

「……………」

記憶を探ってみる。WAXA、敵、搜索、屋上、茶髪の少年

「ああっ……！」

それを思い出すと身体がまた疼きだす錯覚にスバルは襲われた。殴られた瞬間の「こまーこまがフラッシュバックされ、殴られた場所に深いな感覚になる。」

「あの、烈斗は……？」

「烈斗？　それが敵の名前なの？」

「はい、光烈斗って名乗っていました」

「ひ、かり……？　本当にそう名乗ったの？」

まるでヨイリーは知っているかのような。烈斗ではなく、光という苗字を。

「そうですね、心当たりが？」

「……いえ、多分違うと思うわ」

けれどヨイリーはそのあとを言わなかった。否定したがっているようだ。スバルにはそれが分からなかったが、そこから言及しようとは思わなかった。

「スバル君に報告するとね、ミソラちゃんとゴンタ君もあなたと同じように寝かされているわ。あなたほどではないけど、大きな傷を負っているわ」

「……大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ。3日で退院できると思うわ。もちろんあなたも」

その言葉にスバルは首をかしげた。ヨイリーは大きな傷を負っていると今言ったのだ。それなのに何故3日後には退院できるのだろうか。

「スバル君は、黄璃病院　穿城大学附属病院を知っている？」
「……聞いたことがあるくらいは

ニホン最大の病院といつてもいいくらいの設備と広さを誇っているといわれているくらいだ。知らないわけがない。院長の黄璃雷伽という人物も数度テレビで見たことがある。元は黄璃雷伽だけの病院だったのだが、去年穿城大学とも協力することになり、名前を2つ持っている珍しい病院だ。一時期その話題で盛り上がったのだが、FM星人襲来という宇宙規模の事件でマスコミも騒がなくなった。

「そこから治療薬を貰ったの。今はまだ試験中なんだけど、効き目は期待できるわ」

「……副作用とかは大丈夫なんですか？

試験中、ということはまだ病院で使われていない代物だ。そんなものを使っているとは到底思えない。

「大丈夫、身体に異変が起きることはないわ。ちよつと腹痛が起きるだけよ」

「そうですか、それならいいか……」

安心したとばかりにため息をつく。

「……その、光烈斗という少年はまたどこかに行ってしまったわ。何でここを攻撃してきたかは分からない」

「そうだ、何であの子はWAXAとサテラポリスのサーチをかくぐれたんですか？」

ただの少年、いやありえないほどの強さと謎を持った少年だった

が、それでも二ホン最強の番犬から逃れられるのは普通ではあり得ない。

「それには、3つの理由があるわ」

逃げられたことを苦々しく思いながらも、ヨイリーは語りだした。

「まず、あの子はワイザードを持っていなかった。これで周波数もないわ」

「でも、あの子自身からは」

「電波変換は解いていたのよ、攻撃して眼を眩ませてから、ずっとね。……彼の電波変換が特殊つてのもあるけどね。本当に微弱よ、周波数は。ウイルスよりも弱い」

なににあんなに強いのはあり得ない、そうもヨイリーは言う。周波数＝強さというのはあながち間違っていないのだ。だがそれを打ち砕く少年が現れた。これは研究者として驚かないわけには行かないだろう。

「でも、カメラなんかはあったから見つけられたんじゃないですか？」

「……あとで気づいたんだけど、ここはハッキングされていたわ。つい数日前、誰も気づけなかったわ」

そのせいでどこにカメラがあるのかも完璧に把握されたいらしい。周波数探索、カメラからも逃れられてしまっつては、今の時代打つ手はない。

「今の時代対電波用に作られているから、電波を極力使われなくて進入されるのは脆弱なのよ。そのためにRWタワーがあるんだけど、

それを突破されてはもう詰み。テロリストも電波兵器を使わなきゃいけないのに、あの子はほとんど使わなかった」

ただ、もう監視体制は強化されたい。熱探知機、カメラの増量なども加えられ、今は烈斗が進入してきても探知は出来るらしい。

「……それで、あの子は何なんですか？」

「身元も分からないわ。1つだけカメラがその子の顔を映していたけど、データバンクにはなかった」

「……この国の人間ではないんですか？」

「分からない、でも日本語を喋っていたんでしょ？」

謎が多すぎる、そういう結論しか下せなかった。

「なんのために襲撃してきたかも分からない。また来るのかも予測できない。分からないことだらけ。ただ1つ言えるのは、あの子がただ者ではないということ」

「そうですね……」

人間のような容姿をした電波人間、けれどそれは恐ろしいものだ。いくなれば街の真ん中にも誰もその脅威に気づけないのだから静かに人が消えていき、けれどその犯人はまた人ごみのなかに消えていく。

『あああああああああああつ!!!!!!!!!!』
「な、何の声？」

防音をしっかりと行っているはずである病室の外から、何か獣のような咆哮が轟いた。ビリビリと壁が震え、地震でも起きているのではないかと勘違いしてしまいそうだ。

「ま、また敵が!？」

「いや、そうではないわ。これは」

がぎやぎやぎやぎやん!! と金属の層が引き裂かれる音が聞こえ、病室のドアが破られた。

『スバルう……!』

「うお、ウォーロック!？」

そこには普段よりもさらに眼を鋭くさせたウォーロックがいた。だがいつもより変わっているのは纏っている雰囲気大きい。重いと評すればいいのか。全てを切り裂いてしまふ鋭さ、といったらしいのか。どちらにしてもいつもよりウォーロックは荒々しかった。

『てめえ、負けてるんじゃないぞ!』

いきなりスバルの目の前まで行くと、動けないスバルの胸倉を無理矢理に掴む。うっ、とスバルは苦しそうになるがそれすらもどうでもいいと思っているかのようだ。

『俺達は1年前に負けて、絶対に今度こそは負けないと誓ったはずだ! なのに、なんでこんなボロ負けを喰らっちゃうんだよ!』

「やめなさいウォーロックちゃん、スバル君は悪くないわよっ」

『黙っててくれヨイリーの婆さん。俺はこいつに言っているん』

その赤い瞳でスバルを見据える。けれどスバルはウォーロックを見ることが出来なかった。怖いのだ、相棒からこんなにも負の感情を向けられるのが。

『負けないと誓ってこの様か！　今回は敵の気まぐれか何か知らねえが、被害者が出ていてもおかしくなかったんだぞ！？　ミソラとゴンタだって死んでたかもしれないねえ。俺達もここにはいなかったかもしれないねえ！　それを分かっているのか！？』

「ぐっ……」

さらに胸倉を強く掴むウォーロック。しかしそんなことで喋れるわけではない。

「……やめなさいウォーロックちゃん」

再度語気を強めて説得をヨイリーは試みた。

「あのとき……いえ、きつとこの世界にいる人間の全てが、光烈斗を止める事は出来なかったわ。ウォーロックちゃんなら尚更。シドウちゃんが万全の状態でいても、きつと無理よ」

『……そんなことは分かってんだ。でもっ』

「今はとにかく、みんなが無事であることを喜ぶべきよ。幸いスバル君たち3人以外の負傷者はゼロ、RWタワーも、半日後には復旧できるはず」

損害なんてなかった、あくまでヨイリーは静かにいう。その言葉に仕方なしとばかりにウォーロックはスバルから腕を放した。

『……で、これからどうするんだ？　やられっぱなしじゃ少なくとも俺は気がすまねえぜ？』

「……サテラポリスが今搜索している。捕まえられるかは分からないけど」

事実上、光烈斗にあうためには彼がまたスバル達の前に現れなけ

ればいけないということだ。その事実を知りウォーロックは舌打ちをする。

「あなたもまだ修復出来ていないんでしょ？ とにかくもとの部屋へと帰りなさい」

『……分かったよ』

ウォーロックは破かれたドアへと歩いていき、それから

『次こそはこんなことはないようにするぞ』

ただそれだけをいき、病室から出て行った。あとにはウォーロックが纏っていた重い空気と、荒々しい雰囲気だけが残った。

5th Violent aura（後書き）

感想待ってます

この頃蒼き流星（前作）のアクセス数を楽しく見えています。なぜかというとユニーク数が30そこらなのにPV数が1200とか凄い数字をたたき出しているときがあるからです（笑

蒼き流星を前作から読んでくれているかたもいてとても嬉しいです。これからも作者は読者のみなさまに満足出来る作品を書く為にがんばっていきます

6th The beast barks.

負けるということは、そのものにとって大きな価値を持つ。ウォーロックはそう考えていた。負けて他人が傷つくのは許されないことだが、自分達が傷つき、それでいて命がまだ健在であるのならそれもいいとも思っていた。その反省を生かして次に繋げればいいから。

1年前、ムー大陸で敗北を喫してからのスバルたちはメテオGの1件でピンチこそあれ敗北はしなかった。自分達は過去の反省を生かし、大きな壁をぶち破ったのだと。

だが今回での謎の少年、光烈斗の戦いは完膚なきまでに打ちのめされた。どこにも言い訳の材料がないほどの、完敗。本気を出されればサテラポリス・WAXAまでも壊滅させたであろう敵に、ウォーロックはどうすればいいか分からなくなっていた。

『……………』

今彼はアマケンの屋上で1人ぼんやりと空を見つめていた。漆黒の夜に光り輝く星の中に彼がやってきた星があるからなのかもしれない。

『…………俺は何をしてきたんだろうな』

彼に似合わないセリフが飛び出す。ここまでウォーロックがへこんでいるのは珍しいかもしれない。だが2度と敗北しないと誓った者の敗北は、常人には背負いきれないほどに重い。

敗北したのは1年前の1件だけではない。それまでも何回も敗北をしてきた。しかし今回ばかりは悔しさが心を隅から隅まで支配して心が辛い。彼に涙というものがあるのなら、きっと流している

だろう。

あの銀色の剣士に申し訳が立たないと、心底ウォロックは思った。あのとき自分達を助けてくれた電波体に謝りたかった。お礼もいえないほどに、まるで風のように消えていった電波体のことを思い出しながら。

「風魔烈風刃！」

ムー大陸でラ・ムーに敗北をしたスバル達はわずかな意識を残しながらもそこで倒れているしかなかった。あとはただ剣でもバルカンでもレーザーでも、ただ殺されるのを待つだけ。弱りきった2人に立ち上がるという考えは出来なかった。そのときに現れたその電波体、周波数もない謎の、どこからやってきたかも分からない電波体。それは万全であつたであろうオリヒメとラ・ムーをいとも簡単に打ち破った。直接どんな戦いをしていたか見ることは叶わなかったが、肌を感じられる疾風と、断末魔にも似たオリヒメの悲鳴のおかげでどちらが勝っているかは分かってしまった。

だがそこまでだったら新たな敵が現れたと思つたかもしれない。実はオリヒメにはもう1人の下僕がいて、そいつが謀反を起こしたとも考えられた。あるいはオーパーツを狙った第三の勢力とも見えたかもしれない。その電波体の声を聞くまでは。

「大丈夫か？」

疲労など感じさせない声、けれどウォロックが一番気にかつたのはそのいたわりの言葉だった。簡素で誰でも吐ける、しかしこの場でそれ以上の言葉があるのだろうか。

「俺は通りすがりの電波人間つつかなんつつか。この世界を救うためにそのオリヒメをぶっ倒しに来た。敵じゃないから安心しろ」
『おま、え……どう……や……て』

「ここに来たのは……あれだ。いろいろここにも別ルートで来れるんだよ。そのところはあまり気にするな。説明するだけ面倒臭い」

「ごごごご、という音が聞こえ地面が激しく上下する。どうやらムー大陸が崩落を始め、ここもすぐに海の藻屑へと成り果てることだろう。」

「スバルは寝ちまっているのかな？ 声がないところを見ると」
『そ、うだ』

「おまえもあんまり無理するな。それとお疲れ様。ここまでよく頑張ったよ」

そのときウォーロックはここが戦場だということを忘れてしまった。今この場が崩れて自分達の身が危ないことが頭の中から消し飛んだ。

「だけどもまだだ。まだ足りない。おまえ達がこれから立ち向かうもう一つの危機は今回よりも辛い」

『また……あるの、か？』
「ある」

未来のことであるはずなのに、超能力でもないかぎりそんなこと分かるはずもないのに、その電波体はきっぱりと言った。ただの予想とは違い、まるでそれしか道がないという風な口調だ。

「あるから、絶対におまえたちはここで立ち止まっちゃいけない。」

「じやなきや俺の助けも無駄だしな」

そこでふとさっきの疑問が蘇る。何故この電波体は自分達を救ったのだと。

『なんで……おれたちを、救った？』

「……それが俺の役割だから。誰かを救って、そして」

だがその続きはウォーロックには聞こえなかった。電波体が言わなかったのか、それとも崩落するときの轟音にまぎれたのかは聞きわけがつかない。

「じゃあな、まだ未熟な英雄^{ヒーロー}さん。もう会わないと思うけど、元気でやっていけ」

『ま、待て。せめて、すばる、だけでも』

「ああ、大丈夫大丈夫。おまえたちはなんと生き残る。それは絶対だ。だからそこで寝ていろ」

その言葉を最後に、謎の電波体はどこかへと消えて行った。ウォーロックの意識はそこで途切れてしまうが、彼らの人生はまだまだ続いていた。それはソロというムー人によって救われたのだと知ることが、意識を取り戻してから数日後ではあるが。

『……それなのに、俺達は………！』

あのととき救ってもらった命、それをシルバー・ウィンドのように使いたいとスバルとウォーロックは決めた。これからどんな災難が地球に降りかかろうとも絶対に打ち破るんだと。そして1人でも多

くの人が救われるようにと。

『俺は、どうすればいいんだよ……教えてくれよっ！』

1人の獣の、叫び声が夜空へと轟いた。

7th The beast goes missing.

「えっ、ウォーロックくんが消えた？」

「うん……もう3日も帰ってこないんだ」

WAXAの病室にはミソラがスバルの見舞いに来ていた。彼女も烈斗に傷を負わされて入院していたのだが、今日ようやく退院することが出来たのだ。

同じ日にスバルは入院して、予定としては今日退院できるはずだったのだがあまりの傷の深さに特效薬を用いても快復までは見込めなかった。

黄璃病院の特效薬は、車に轢かれ重傷を負った少年を一週間で感知させるほどのものだ。副作用に腹痛が起こることだけが問題だと思われていたが、どうやら違ったようだ。一般人向けに開発された物である為に仕方ないかもしれない。

「……僕が烈斗に負けても、落ち込んでなかったからだと思う」

あのときのウォーロックの表情を思い出す。あれは本気で悔しがつていた。怒ってさえたと思う。それなのにスバルが何とも思っていないところを見れば、キレるのも無理ない。

『ポロン、ウォーロックなんか気にしたってしょうがないわ。どうせふらっと戻ってくるわよ』

「そうだよ。ウォーロック君がスバル君から離れるわけないじゃん」

そう励ます2人だが、スバルにはどうしてもウォーロックが帰ってくると思えなかった。ウォーロックが、自分を見捨てるのではないか。そんな恐怖に駆られてしまう。

もちろんそうではないと思う自分もいた。スバルとウォーロックは1年を共にし、キズナを深めた。それは他のオペレーターとウィザードとは比べ物にならないくらいに。それが、簡単に切れてしまふとは思いたくも無い。

「……どこにいるんだろう」

窓から外を見る。今はもう夕方だ。オレンジ色に染まった太陽が今まさに沈もうとしている。空にはもう月や星たちが煌いており、夜の訪れを知らせている。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。スバル君は心配しすぎよ」「でも3日も戻ってこなかったのは今までないんだ。それに、今回はばかりは本当に落ち込んでいると思うし」

『負けたことがただ悔しかっただけでしょ？ あいつなら明日にでもあかねさんのご飯目当てに帰ってきそうよ』

それはあるかも、とミソラとハープは笑う。たしかにありそうなシチュエーションではある。けれど、けれど

「そんなに心配なら私達が探してこようか？」

さつきから浮かない顔をしているスバルが本気で心配になり、まだ病み上がりの状態でそう訊いた。だがその提案をスバルは首を振って遠慮する。

「これは僕達の問題だから。僕がなんとかするよ」

しかしこのままではスバルの精神がもたないのではないか。そんな不安がミソラの頭を過ぎてしまふ。

「そりゃたしかに僕も辛いさ」

そんなミソラの心を察したのか、スバルもやや苦笑いしながら話す。

「でも、僕が悪いんだから。僕が決着をつけるよ。……今は体を休めて、体が治ったら探してみるよ」

「……だけど」

「ごめんね、こんなこと聞いちゃって。僕が悪かった」

その自分を責めて自ら傷つこうとする表情を見て、ミソラはもう一度何かをいいかけた。否定してあげたかった、君は何も悪くないと。自分一人だけで背負う必要は無いんだと。だが

『ミソラ、スバル君も疲れているから今日はもう帰りましょう？
あなただって退院したばかりなんだから』

ウイザード
相棒からの言葉が遮った。

『さっきも言ったとおり、ウォーロックはどうせすぐに戻ってくるわ。気にすることはない』

「うん、そうだね。僕もこんなことなれていないからさっきは動揺しちゃってたよ」

ハープの提案にスバルが後押しをする。まるで、すぐにミソラを帰りたいかのように。

ハープがそんなことをしたいとはミソラも思っていない。スバルを1人にさせたほうが今はいいと考えているのだろう。逆を言えば、ミソラには何も出来ないということを知っている。

スバルはハープの提案を僥倖と思い今すぐ1人になりたいと思っている。1人で気持ちを整理したいのだろう。

結局、ミソラは誰にも必要とされていなかった。

「……………分かった。体に気をつけてねスバルくん」

それだけをいうと、ミソラはすぐに部屋から飛び出してしまった。スバルがそれに対し「うん」というのも聞かずに。自らのウィザードもその場に残して。

自分が必要とされないと認識してしまったときほど、哀しいときはない。

『…………ミソラを泣かせちゃったわね』

「ごめん、ハープ。…………ミソラちゃんに酷いこと言っちゃって」

『それについては本当に殴ってやりたいわ』

ハープは邪悪そうに笑みを浮かべ、その手で拳を作り始めた。けれどそれをスバルに向けたりはしない。

『…………私が探してくるわ。あの馬鹿、どこにいるか分からないけど』
「無理しなくてもいいんだよ？ ハープも結構怪我を負ったんでし
よう？」

『あら、ウィザードはすぐに傷を治せるわよ。気にしないでいいわ』

それに対しスバルは微笑むことだけが精一杯だった。どう会話を繋げたらいいかと思いつかないし、はたしてここで会話をする意味があるのかも分からなくなってきた。ただその場を曖昧にするくらいが彼には出来なかった。

『安心しなさい。あいつは私が見つけてくるから。少し時間はかか

つてもね』

「……ごめんね」

『あいつがいなきやスバル君が悲しむ。スバル君が悲しめばミソラが悲しむんだもの。仕方ないわ。オックスも誘ってみるつもりだけど……』

「時間が空いたらでいいからね？」

『当たり前よつ。ミソラもあんな状態だし、一日中つてわけにはいかないんだから』

それにライブとかも今月はあるし、私がついてないと仕事が終わらないのよ、と付け足すハープ。

「今日はありがとう。大分楽になったよ」

『じゃあ、今度お見舞いに来るときはもっと楽になっていて。ミソラが悲しまないくらいに』

「うん、分かった。がんばってみる……」

その、微妙に翳ったスバルの顔を横目で見ながら、ハープも病室を去った。これから向かうのはどこにいるかもしれない、ウォーロックの場所だ。

（全く、本当にどこに行っただか……。でも、動けるのは私だけだし、オックスも誘って何とか探してみますか）

もちろんハープにはウォーロックがどこにいるのか検討もついていない。まさかF M星に帰っているとは考えにくいし、地球、さらに二ホンにいるのは確実だ。

電波体である彼女なら、見つけれないことは無い。暇なときに少しだけ探せば、いつか見つかるはずだ。どうせ、キズナが無ければ生きていけなくなってしまうただのだから。

（……そう考えれば私達は弱くなったものよね）

F M 星にいるところはキズナなんてものが希薄であった。逆にいえばキズナがなくても生きていけた。そんなものがなくても自分の為に戦えたし、それで何かが不足しているとも思わなかった。

だがもう今は違ってしまう。キズナがなければハーブは何か足りない、寂しいと感じてしまうだろう。この地球という星に、「適応」してしまった。

（間違いだとは思ってないけど、なんか変な感じがするわね………
…）

キズナが大切だと思っている自分を否定するつもりは無い。それでいいと思う。

（キズナを大切に思うなら、それに見合ったことはしなきゃいけないだよね……）

今はその隣に誰もいない、孤独なウィザードに向かって思う。

（だからさ、さっさと戻ってきなさいよ）

7th The beast goes missing. (後書き)

感想待ってます！

感想が迷惑だということは無いので、書こうと少しでも思ってくださったらぜひ書いてください。別に一言感想でも結構です！

では、次話からも頑張っていきます！

それと、希望への架け橋で今さっき感想受付が「ユーザー」からということになっていましたが、「制限しない」つまりユーザーでない方でも書き込めるようになりました！

本当なら最初からそうするつもりだったのですが、申し訳ない・・・

8th boy and girl is talking.

「……それで、ぶつとばしてきちゃったの？」

少女は夜に浮かぶまん丸とした満月など気にせず、苛立たしげな声を上げた。彼女にとって快晴の空に浮かぶ星々など、どうでもいいようだ。

「君は前からやってしまうとは思っていたけどさ、やらない約束だったでしょ？」

その問いに、問われた少年は苦い表情をした。

「別に、何か悪いのかよ」

ようやく絞り出した声は、酷く弱々しく聞こえた。彼という人間を知っていれば、きつとおかしいと思うことだろう。普段の彼はいつも力強く、どんな人だろうと寄せ付けないオーラがあった。なのに、何故か今の少年には無い。

「悪いに決まっているでしょ？」

そんな少年に対し、少女はいつも通りの調子で問い詰める。

「WAXA襲撃って、テレビで大々的に報道されているんだからね？ あなた今犯罪者なんだからね？」

そうつい詰められている少年　光烈斗は口ごもりながらも反論した。その顔には動揺の色が見て取れる。

「た、たかが襲撃だろ？ 死人だっていらないし、怪我人だって電波人間だ。そんなに重傷にはならないだろ？」

しかし少女　水城明菜は呆れて溜め息をついてしまった。まるで駄目な弟を見ているような視線に、烈斗の顔が赤くなる。どうやらそんな屈辱的な視線に耐えられないようだ。

「……そういう問題じゃないでしょ？ 堂々とテレビに映るなっこと」

「え、映ってなんかいないぜ？ 俺はちゃんとカメラを避けたんだ。全てな」

そんな烈斗の弁明を無視して水城はハンターを操作、それから添付ファイルと一緒に烈斗へとメールを送る。

まさか、と思いながら新着メールを開けてみる。急いで添付ファイルを開くと、それはテレビニュースであつた。画面に映っているのは破壊されたRWTタワーだけ。

だが映像はそこで終わらない。どこか屋内のカメラ映像に切り替わったのか、無機質な天井と通路が見える。そこに何かの影が通りかかった。あまりの早さに何が通り過ぎたかが分からない。

しかしそこは今の技術で巻戻し、ストップくらいはお手の物だ。すぐに巻戻しが行われて通り過ぎた正体を凝視させられる。

ばっちり、光烈斗の姿が映し出されていた。それも今の技術でブレなし、このまま指名手配として出されても問題ないだろう。

「……やっちゃった」

思わず天を仰いでしまう烈斗。これで最悪の犯罪者としてすぐにも写真が出回り、外に出るのは難くなるだろう。

「あなたどんな目的で攻撃したのかは、わからなくてもいい。そこについては私も何も追求しようとは思わないわ。でもね、足だけは引っ張らないで」

そう強く念を押す水城は、本気でこれからのことを心配しているようだ。つまらないことで失敗したくない、そんな思いがひしひしと伝わ

ってくる。

「……分かっているよ」

「分かっているからこんなことになっているんでしょ」

「分かっているっていつてるだろ!!」

思わず声を張り上げてしまう。もし彼の近くに机などのものがあればきつとその力で殴り壊していたかもしれない。だが生憎ここは何も無い。窓があるくらいだ。もともと水城が借りている一室なためにこのようなことになっている。

「…………たしかに言い過ぎたわね」

叫んだせいで息が荒い烈斗に向かって、水城は少々罰の悪そうに謝った。さすがに年下相手に言い過ぎたと思っただけ。

「…………こっちこそ、悪かった」

元々自分が悪いのだと、今度は烈斗が謝った。彼がしくじらなければこんなことにはならなかった。もつと言えば、彼が無駄に襲撃をしなければしくじることなかった。

「
……」
「
……」

嫌な沈黙が簡素な部屋を支配する。外から入ってくる微風が2人の頬を撫でるが、別段気持ちいいとは双方感じなかった。

「……それで」

嫌な沈黙を無理矢理破ったのは水城のほうだった。

「何かつかめたことは？」

まさか収穫なしとは、水城は考えていなかった。襲撃したのならそれなりの成果を挙げてくるのが烈斗だと、彼女は信じていた。

「ああ、掴めたことはいくつかあった」

それに対し烈斗もさっきの沈黙がなんでもなかったかのように接する。

「まず1つ目は、星河スバルの実力だな。……あれは酷い、ラ・ム
ーに負けたのは納得できる」

「そんなに弱かったの？」

「俺が手を抜いて圧勝」

答えに思わず水城は顔を引き攣らせる。しかしそれすらも気にしないで烈斗は続ける。

「2つ目は、あいつらはシルバー・ウィンド キリユウについて

何も知らなかったみたいだな。名前聞いてもぴんとこないようだっ
たし」

「……………じゃあ手がかりは？」
「なし」

どうやらそれが一番彼女には堪えたようで、その場にへたり込んでしまふ。どうやらスバルに落胆してしまっているようだっ

「それじゃあ、何の為にここまで頑張ってきたか分からないじゃん
……………」

あまりにショックが大きかったのか、「ちょっと外で風に浴びてくる」といって部屋から出て行ってしまった。それを烈斗は一瞬追いかけようとしたが、すぐにそれをやめる。彼女が求めているのは、自分ではないことを知っているから。

「……………止めないのか？」

そんな彼の心中を知っていながら、質問してくる電波体がいた。見れば部屋の入り口にそれは立っていた。

水色がベースの服に藍色の防具、さらに背中にあるのは2メートルもありそうな、うねった剣。さらにそこから発せられる周波数とその電波体を異常だと周囲に知らしめていた。

「フランベルジェか。何なんだろう？」

質問に対し、烈斗は質問で返した。余程答えたくないようだ。

『特に用事は無い。我が主君が、いきなり出て行ってしまったのだからな』

「いつものことでしょ？」

『だがおまえと2人だけで話す機会はいつものことではない』

何か話すことでもあったか？　と思考を巡らすが烈斗には思いつくことは無かった。

『ロックマンはどうだった？』

その問いに思わず烈斗は嘆息してしまう。このウィザードはいつもこんな調子だ。強そうな奴を見つけると途端に戦おうとする。それが我の本懐だ、といっているのだから手に負えない。

「弱かったよ。防御力は障子並み」

『ほづ、おまえが戦って圧勝か。我ならば瞬殺かな？』

「……なんなら今俺と戦ってみる？」

その一言で烈斗の体が『変化』した。それは目に見えない変化だが、電波体であるフランベルジェには分かる。烈斗が『電波化』したのだ。

『今ここで戦ってみるがいい。この部屋はどうする？　我が主が泣くぞ』

「キリウウとの想い出の場所だろう？　俺がなくなっても悲しまないよ」

『主が泣くことに対して、おまえは悲しむだろうに』

「……………だから何？　おまえのその口を黙らすことが出来るならば壊してでも攻撃するよ」

烈斗がすつと腰を落とし拳を構える。ここらフランベルジェまで5歩の距離、それくらいの距離なら烈斗は1歩で詰められる。

そう、このままフランベルジェが何もしなければ。

ふっと、風が揺らいだかと思った。それは外から入ってくる微風の物だと、烈斗は信じて疑わなかった。だから何故自分の首もとにフランベルジェの愛剣　その使用者の名前を冠する剣がぴたりと添えられているのか分からなかった。

『1つ忠告しておこう』

朗々とフランベルジェは語り出す。

『おまえ風情の、たかが人間を少しだけ超越したような輩が、我輩に勝とうなどと思うな』

その眼光がきらりと光ったかと思うと、次の瞬間には烈斗の首もとが浅く斬られていた。電波体の為に血は出ないが、それでも痛覚はある。思わず首を抑えうずくまってしまう。

『所詮はその程度の実力しかないのだ。いきがるな、若造が。我は200年も前から存在してるのだぞ？　それをどうにかしようとするのがおこがましい』

「がっ、あっ、……でもあのシルバー・ウィンドには負けたんだろ？」

最大の挑発のつもりだった。これでフランベルジェを怒らすことが出来れば勝ちだと、そんな浅はかな考えを持っていた。だが、現実はそのようではなかった。

『そうだな』

あっさりとフランベルジェは肯定した。

『そのとおりだ。我はあいつに負けた。完膚なきまでに』

しかし、と彼は続ける。

『だからこそ我は強くあろうとする。誰よりも、奢ることなく上に上り詰めようとする。決して歩みはとめられない。断じて』

剣を背中の鞘に戻しながら

『おまえとは違ふのだよ。分かったら自分を見直せ』

彼は主の下へと戻っていった。その背中はまだ強くあろうとしただけの、誰よりも奮闘し敗北した者の、物だった。

「……ちつくしょう」

フランベルジェの背中を見送りながら烈斗は毒づく。ここまで無様な敗北をしたのはひさしびりであったために、ショックが大きかった。

「くそつたれ……っ」

そういわずにはいられないくらいに、彼もまた落ち込んでいた。ハンターの中でリカバリーを使用しながらも、彼はゆっくりとカードでは治せない心の傷を治そうとする。

「お、どうしたのフラン」

相棒の名前を略したニックネームで呼ぶ水城は、ハンターの中に入っていった存在へと声をかける。

『別に、何もなかった』

「嘘だ、烈斗と何か喋ってたでしょ」

『つまらない世間話だ』

そう嘘をつくフランベルジェを横目で見ながら、水城は月光に照らされる眼下の街を見下ろした。

「これだけの数の人間が生きていると思うと、何だか感動しちゃうよね」

誰に向けたわけでもない言葉、だからフランベルジェも特に何か言おうとはしなかった。

「これだけの人間を救おうとする人間って、やっぱり凄いと思うよね」

思いを馳せるのは銀色の戦士、今はこの世界にいないであろう存在。いつかあって、面と向かってもう一度喋りたい。それだけ进行しながら、彼女はどことも知れずにそのマンションから出て行った。

8th boy and girl is talking. (後書き)

新キャラ・フランベルジェ登場ということでした。

え、新キャラじゃない？ H A H A H A そう思う方もいるかもしれません。ただここでは新キャラと扱わせてもらいます。

では、感想待ってます

9th Much anticipation (前書き)

ギャリック砲！

9th Much anticipation

「……………ふう」

ヨイリーは研究室で1人ため息をついていた。一向に烈斗の尻尾がつかめないのもあるが、ウォーロックの足取りが完全に分からなくなっただけが大きい。

もちろんヨイリーとてウォーロックが戻ってこないとは思っていない。ただもう一週間にもなる。いい加減戻ってこないと、スバルの精神的にもきついものがあるだろう。

時間が空いているときにハーブや、復帰したゴンタとオックスなどが搜索をしている。それでも見つからない。

ここまで来るとヨイリーは1つの説が浮かび上がっていた。そう誰かによってデリートされてしまったのではないかと。

突発的な怒りで出て行ったウォーロックを、誰かが好機とばかりに倒してしまったのではないか。そうすればいつまで経っても戻ってこないのにも合点がいく。その候補も、最近ここを襲撃してきたのだから。

今の状態である最高戦力であるスバルがいない以上、いても怪しいが、烈斗に対抗するのはほぼ不可能である。出来れば迅速に捕縛して無力化したいところだが、あの逃げ足の速さだ。いくら顔が割れてしまっても見つかりはしないだろう。

この予想は、暁にだけ伝えておいた。すぐにでもなんとかする、と言いたそうだったが、病み上がりの状態で電波変換すれば彼の身体は植物状態になりはてるかもしれない。

そのため、サテラポリスとWAXAでは1つの案が出されていた。それは要約すると、もう1人の電波人間を作り上げること。アシッド・エースと同じように、もういったいの電波体を造り上げて戦力にしてしまおうというのだ。

「それで解決するのは何1つないかもしれないのに」

これは長官やヨイリー以外の研究者の提案だ。彼らはアシッド・エースが『不良品』であることを知ったやいなや、すぐにもう1つの電波生命体を作り上げようと研究を開始していたらしい。ただ研究の成果が認められることだけを至上の喜びと捉えた彼ら 中には違った考えをしている人間もいる らしい行動だ。その行動は今となってようやく意味を為そうとしているがまた皮肉な話だ。

もし、仮にヨイリーがスバルとウォーロックと出会わなければ、そうなっていたかもしれない。あくまで彼女としては地球や人を守るために、新しい電波生命体を作り上げようと奮闘したかもしれない。

だが彼女は知ってしまった。1人の少年と1体のウィザードのことを、そしてそのキズナを。だから彼女はそんなことは出来ない。たとえサテラポリスが滅びそうになっても。ウォーロックのことを見捨てることだけは。

「お疲れのようですね、ヨイリー博士」

そういつて突然研究室に入ってくるのはヨイリーにも見慣れた顔だった。彼が帰ってくるのを、ずっと待っていたのだから。

「あら、大吾ちゃん。ここに来るのは珍しいわね」

彼とは職場を同じとしているが、大吾と勤務時間内に会うのは極少ないことだ。彼とヨイリーでは、研究内容が若干異なることがそれに起因する。

「あんまり考えすぎるのも毒ですよ？」

右手で温かいコーヒーを渡され、軽くお辞儀しながらそれを受け取る。だがすぐに口にしようとは思えなかった。

「分かっているわ。でもね、どうしてもウォーロックちゃんのことを考えると」

「気持ちは分かります。息子の友人がいなくなつては、すぐに見つけ出してやりたい」

だけでも、と彼は付け足す。

「あなたは1人ではないのですから。僕でも探すことは出来ますので」

「……気持ちは嬉しいわ、大吾ちゃん。私もそのことについては結構分かってるつもりです」

自分の身体がオンボロであり、無理しすぎればすぐにでも寿命が縮まることは彼女も理解はしていた。だがどうせもうすぐ消えてしまふ命なら、今すぐ散らせてもいいのではないだろうか。最近彼女はそう思い始めていた。

もちろんそんなことを周りの人間が知れば、すぐにでも引き止めるだろう。それを分かっているからこうして1人研究所に籠っていたのだ。

「それに、息子があんな悲しそうな顔をしているのに、探せないのは辛いんですよ」

「……………」

その言葉にヨイリーは何もいえなくなった。穏やかな口調ではあるが、大吾からは息子の為に働きたいという意志が伝わってきてい

る。

「そうね、たしかにあなたには探させてあげたいわ」

「なら」

「でもあなたにはどうしてももう1つの仕事を遂行してもらいたいの。どうしてもね」

「……光烈斗の謎についてですか？」

あの特殊な電波変換、いや電波化というべきか。あの構造が不可解でヨイリーには仕方が無かった。なので多くの研究者達には電波化について調べて貰っていた。もちろん、大吾もその一要素である。彼はブラザーバンドを宇宙に広げようとした男である。それは彼の息子によって成就され、遠く離れたFM星、AM星からは毎日交信がやってくるほどでもあった。そんな彼に、今AM星との交信を今頻繁に行ってもらっている。

ヨイリーの見解からして、あれは生身の人間をそのまま電波に変えているものだ。だから何のアーマーやバイザーも無い。身体そのものを、ただ電波にしてしまうだけだから。

よって、AM星人であるウォーロックにその身を電波にしてもらった大吾にはこの任務を渡したのだ。彼なら何かしらの手がかりを掴めるだろうと思って。

「ですが、それは他の人間でも出来ます」

「ええ、それは分かっているわ。でもあなたにはただ電波化のことについて聞き出して欲しいわけじゃないの」

「……何か他にあるんですか？」

「その身体を、元の生身の身体に本当に変えられないかを実験して欲しいから」

「……………ッ！」

ヨイリーの言いたいことが分かり、大吾は思わず息を呑む。

烈斗が自由に肉体と電波の身体を変えているのは、つまりAM星人と逆のベクトルに働く特殊な能力があるからだ。ヨイリーは推測しているのだ。それがたしかにあればあの不可解な電波化というのが解けるかもしれない。

「ですが、そんなのが本当にあると思っているのですか？ AM星人だけの能力では！？」

「もちろん、私もあんな年の子がそんなことを出来とは思っていないわ。もつと別の人間が、それを可能にした……」

だがそんな人間がこの地球にいるのだろうか、大吾は考える。電波変換というのは近年ようやく発見された能力といっても過言ではない。それと類似したものが、ほぼ完成して存在するというのだろうか？

「ギーラという科学者を知っている？」

「……………先月アメロツパによつて処刑された？」

ギーラ、ヨイリーが出すのも無理は無い。その名前はたしかにこの二ホンでも有名すぎた。こと電波においては世界の権威といっても過言ではないくらいに。

ただその裏で怪しい噂が立ちすぎた。人体実験、それも孤児などを世界中から集めてモルモットのように実験していると。

それだけならまだ妬みなどが生んだものだとい蹴できる。だがそれ以上に大きな内容がアメロツパから発表された。

ギーラがアメロツパを転覆させようとしていた。

どういう経緯でそれが特定されたかはアメロツパは公表されなかったが、腐つても最高の科学者を処刑にするくらいではある。アメロツパが公表したことはほぼ間違いないだろう。

科学者が国家転覆を考える時代、と一部では大々的に報道されたものだ。しかし一般人のなかではギーラを知っているものが少ないため、二ホンではあまり報道はされなかったが。

「あの科学者が集めた孤児の中に、光烈斗がいたら……？」

「……！ それは」

ありえなくも無い話だ。全く正体のつかめない、どこの人間かも分らない少年。必然的にそれは孤児か何かだ。

そして、かの悪名高き科学者なら、とんでもない技術すらも開発していたかもしれない。

しかし大吾の予想を遥かに凌ぐほど、ヨイリーはあり得ない説を言い出した。

「あなたは、FM星人がAM星人を破滅に追い込もうとしたのは覚えてるわね？」

「……はい。それが何か？」

ケフェウスというFM星人の王が、右腕であるジェミニにたぶらかされて行ってしまったこと。今ではもう触れてはいけないことというものになっているが、誰も話そうとはしないが、過去は変わっていない。

「もし、もしよ。そのときどさくさにまぎれてAM星人を捕縛していたら？」

「……なんで？」

「何でって、それは決まっているじゃない。人間を電波に変えてしまったためよ」

自分の顔から力が抜けるのを大吾は感じた。突拍子も無い話だと

あっけにとられているが、それをあの科学者がやってしまいそうかもしれないと思ってもいる。

「アンドロメダによってAM星人はきつと大きな傷を負っていたに違いない。なら捕まえるのはそう難しくないかもしれない」

「ちょ、ちよつと待ってください！　まずなんでAM星人をいきなり捕まえるんですか？　それはおかしい！」

AM星人との存在などここ1年発見されていなかったものだ。そしてギーラがAM星人の存在を知っているわけが無いのだから。

「……あなたは、自分の船員クルーのことを覚えているわよね？」
「……………もちろん」

嫌な予感がした。ここがかつて自分と同じように電波にされ、未だ見つかっていない同士のことを出されて、恐ろしい考えがヨイリーからいわれてしまうのではないかと。

「彼らがもしも、何かの偶然によってギーラに捕らえられていたら？　宇宙船で偶然に」

「そんなことがあればすぐに世界中に報道されます！」

電波で出来た人間など世紀の大発見である。それを見つけた科学者が、大々的に世界に報せたいと思わないわけが無い。　ギーラという異物は分からないが。

「……そして捕まえられた彼らは全てを話したのかもしれないわ」

無視して続けられるヨイリーの言葉があまりにも無慈悲に大吾の耳へと入り込んでいく。やめてほしいと懇願しても、最初の用を忘

れてしまっくらいに。

「宇宙には、人間を電波に変えてしまふ生命体がいるって」

あくまで自分の仲間がどうなったかまでは、推測をいわないのが優しさか。けれど大吾もそんなことを聞かされたら、考えずに入らなかった。自分の仲間は、ギーラによって殺されたのだと。

9th Much anticipation (後書き)

感想待ってます

そっぴやツィターやっています。何か質問あればお願いします
<http://twitter.com/#!/matonaka-seiya>

現実とはいつも残酷なものだ、と水城明菜は思う。いつも自分に對しては酷いを仕打ちをするのではないかと錯覚してしまうくらいに。

「ほら、これがレポート用紙だ」

担任の教師から数十枚にも及ぶ紙束を渡され、思わずげっそりしてしまう。何故二ホンには学校があり、通わなければいけないのだと。別に法律上通わなくてもいいのだが、それで就職の幅が狭まるためにほぼ強制と言って過言ではない。本当に残酷だ。

「先生……いくら私がさぼったからってこれは多すぎると思いませんか？」

水城は2日前にあった数学の授業をさぼっていた。それも無断欠席、当然その罰として何か授業の代わりになるものを科さなければいけないのだ。だがこれは多すぎる。なんていったって問題集から問題を300問選んで解いて丸付けをしるというのだ。

「思わないな」

眼鏡を掛けた堅物そうな教師は水城のいつていることなどものともしなかった。さすが天下の穿城大学附属高校の教師といったところか、甘さなど微塵も持っていない。

「授業を休んだということは悪だ、水城。どんな理由があってもそんなことは赦されない」

「別にいいじゃないですか。あまりの熱に連絡することも出来なかったんですから」

「熱だろうが休むことには変わりない。それで赦されるわけではない」

教師はそういつてさっさと職員室から水城を出て行かせようとする。今は昼休みだが教師も暇というわけではない。小テストや次の授業をどうするかなどを考える時間が昼休みというわけでもあるのだ。1人のサボリ魔のせいで邪魔されては困る。

「いいじゃないですか。3分の1くらい減らしても」

「どのくらい授業が進んだか、おまえは知っているのか？教科書で言えば10Pが進んだんだ。すぐに追いつけるとでも思っているのなら、私の授業をなめすぎだ」

この高校は1年生のうちに3年分の授業過程を終わらせ、2、3年生は大学の授業に入るのだ。もちろん授業の進みは早く、きつと他の高校生なら1週間で退学届けを出してしまうかもしれないほどだ。

「このまえのテストは学年1位ですが」

何とか宿題を減らそうと努力する水城は、過去の実績を出して食いつかる。しかしこの教師には通用しない。

「1位だからなんだ？次も1位を取れると思っているのか？」

あくまで過去の栄光だと切り捨てる。ここまでさっぱりと切られでは食いつかりようも無いはずなのだが、水城は諦めない。これは世間一般では「諦めの悪い子」と言われる。

「取れます」

断言した。授業を熱（仮病）で休み授業内容がさっぱり分かっていないのにそれでも彼女は学年1位を取れるといったのだ。その自信と無謀さは盛大な拍手と嘲笑で応えなければいけないはずだ。けれど教師はそうしない。

「無理だな」

断言した。この教師もこの教師でただものではない。全開のテスト前の数日間、水城が無断欠席で休んでいたのにも関わらず学年1位を取っていることを知っているのにだ。どこからそんな確信が持てるのか知りたいくらいである。

「おまえには無理だ。取るためにはそのくらいの問題量を解かなければいけない」

「そうしなくても取れます」

「いや無理だ」

こうした会話が耳に入ってくるのは他の教師にとっては迷惑なのだが、苦情は無い。なぜなら他の教師は生徒達に質問攻めにあい優しくレクチャーしているからだ。簡単に言えば水井城が食い下がっている教師が嫌われているだけなのだが。

「努力をしていない人間には無理だ」

「私だって家で努力しています」

「家で『も』努力しろ。学校でもだ」

もちろん教師として水城の容量のよさは知っている。彼が担当して

いる生徒の中では恐らく1番だろう。それは認めるが、彼女が努力しないのが教師の立腹の原因だ。彼女は上を目指そうとしない。この学校に入ってその実力をさらに伸ばそうとは考えていないのだ。

「嫌ですよ。出来ることを何でもまたやらなきゃいけないんですか？意味が分かりません」

「それがおまえの成長に繋がるからだ」

「……っていうか、これ次の単元も入っているじゃないですか！授業でやっていないのに！」

「予習をしておけということだ」

「何でもするか！」

「何でもだ」

そんな会話をしていると遂に時間が観念したのか授業五分前の予鈴が「キンコンカンコン」と学校中に鳴り響く。それを聞いて、しかし水城はまだめげていない。ここまできると『教師に食いつがった時間』でギネス記録保持を狙えるかもしれない。

「わたしは宿題なんてやりたくありません」

「いい加減にしろ！」

しかしそろそろ教師がキレて、記録保持をすることは出来なかった。水城は無理矢理に退室させられてしまう。

「なんなのよあの先生！」

既にしまっているドアに文句をふっかける。もちろんドアは何か言うことはしない。ただ自分自身を締めることによって存在意義を成し遂げているのだから、さすがとドアだ。

『少しは静かにしたらどうだ？ 我が主よ』

水城の大声にさすがに参ったとばかりにハンターからフランベルジェが声を出した。

「だって、これは酷いよ！ 何でこんなにも問題解かなきゃいけないの！？」

『サボったからであろう？』

「そうだけどさ、多すぎるじゃん！」

『我には多いのかよく分からないが』

「とにかく多いの！」

職員室前で叫ぶ女子高生なんて非常識としか考えられないのだが、特にとがめられない。職員室のドアは防音対策がばっちりで教師には聞こえないのだ。

「酷い教師もいたんだ……私はがっかりだよ」

『斬ればいいじゃないか』

恐ろしいことをあまりにも平然と言われて、思わず水城はそのまま会話を続行しようとしてしまった。だが何かおかしいと気づいた彼女は、恐る恐る下僕へと訊く。

フランベルジェ

「今なんていった？」

『斬ればいいじゃないか、と』

「あほか！」

もしフランベルジェが実体化していたなら思いっきり突込みをかましていたところだろう。

「お金が無ければ盗めばいいって思うのと同じよ」

『けれど、それが一番手っ取り早いだろう?』

「そりゃそうだけど……」

ここにも常識の無いものがいたようだ。彼の場合は200年間も殺し合いばかりしていたので、そう思うのも無理は無いのかもしれない。しかし自分のウィザードがこれではいつか人を殺してしまうのではないかと思い将来に不安を覚えてしまう。

「魔法があればいいのに……」

『そんなものに憧れるのはどうかと思うが?』

「届かないこそ憧れるんだよ」

本気が冗談か分からない。そういう水城。どうやら彼女はさっきの教師との会話で相当疲れているらしかった。だがフランベルジェに「すぐに教室に戻ったらどうだ?」という気遣いは出来ない。騎士として恐らく失格だ。

「はあ……あの人には届かないのかなあ」

彼女が今思い浮かべているのはある少年のことだ。今はもう届かない存在、どこにいるのかも分からない。生きているのかさえ確証の持てない、淡い存在。

『私は届くと思うが?』

フランベルジェが思い浮かべているのは銀色の剣士の顔だ。届くと思う、というよりは届いてみせるというほうがあっているかもしれない。彼ならたしかに不屈の闘志で届くかもしれない。あの最強の剣士へと。

「あなたと私が思っている人は違うでしょ？」

『そうだが、大したことないということだ。あいつとおまえが思っている人間は、ほぼ同一人物なのだからな』

「そうだけどさ……」

それでも納得のいかない水城に止めを刺すように、授業開始のチャイムが鳴った。その音にぎよっとする水城。どうやらまだ余裕があると思っていられない。

「なんで教えてくれなかったのよ！」

『別に、さばればいいだろう？』

「言い分けないじゃない！ 次は化学よ！？」

彼女は数学は出来るが化学が苦手だ。次の授業に出なければテストが危うくなってしまう。

「うわああああ、どうしよう！」

そついいながら教室に帰還する主人を見て、置いていかれた騎士は大変そうだなとぼんやり思っていた。フランベルジェは別に彼女と24時間一緒にいるわけではない。というか学校には来なくてもいいとも言われている。

何故彼がここに来るのかと問われれば、それは彼自身にも分らない。どこに行く予定も無いのだから、ついていってみるというのが答えだろうか。

『……………』

そんな彼はある気配を感じていた。どこかに何か異物がいるよう

だ。それはウイルスと呼ばれる、彼に言わせれば雑魚のような存在だ。

『私も暇だから戦わせて貰うか』

もとより戦うことこそが彼の唯一出来ることだ。暇で暇でしかないときに、敵が現れてくれるのはとても嬉しい。どうやら屋上にいるようだ。それも約10体くらい。

そうと分かればあとは行動あるのみだ。フランベルジェは周波数変換で屋上へと一気に移動する。さつきまでは天井があつたが、今はそれも無く無法地帯に陽光が突き刺さる。

予想通りにウイルスはいた。だがそれは少しフランベルジェと予想が異なる。ウイルスというよりは、ウィザードといったところか。

『グオオオオオ』

だがその声はもはや人工知能とは思えぬほどにいかれており、野獣を髣髴させる。

『……………これは』

フランベルジェは知識が乏しいため分からないが、このウィザードは俗に言うノイズドウィザードという存在だ。ウィザードから生まれるノイズでウィザード自身が壊れてしまふと表現すれば分かりやすいか。

しかしフランベルジェにとってそれはどうでもいいことだ。あくまで敵だと分かればそれでいい。敵がどんな名前をしようが、彼にとっては一銭の価値も無い。

『ちようどいい、斬られてもらうか』

背中から二メートル超の大剣を構える。それは波打つ剣、かつて炎の剣とも評されたその名前は「フランベルジェ」。

『少しは楽しませてくれよ?』

そういうと同時にフランベルジェは突っ込む。それに気づいたノイズドウィザードもソードを出し応戦しようとする。春の学校の屋上で、1つのバトルが展開しているとは、まだ誰も知らずにいた。

11th He want to be a HERO .

「……………」

スバルはというと、もう病院は退院していた。その体は完治しており、副作用の腹痛ももう治まった。だから彼の顔に宿るのは笑顔か心配してくれたみんなに対する謝意だけのはずだった。

なのに今の彼には何も宿っていない。あえていうならば虚無。青空を見上げる彼は何の表情を顔に出していなかった。

授業中、先生に注意されようがただただ空を見ていた。誰かに話しかけられてもその目を空から外すことはなかった。もしかしたら今は見えない星を見ているのかもしれないが、周りの人間からしてみればスバルがおかしくなったとしか言えないだろう。

ルナ達はなんとか話しかけようとしたが、スバルから出る雰囲気には怖気づいて何も出来ずにいた。あんなにもスバルが暗い顔をしているのが、恐ろしかったのだ。

5年生当初はあんな顔をしていなかった。ただ学校嫌いの少年だと思っていた。学校を嫌がるだけで、あんなにも何も乾いた表情をしていなかった。それはただ父親がいなくなったのを、あかねが必死で支えたが故のことだ。

「どうでしょう、委員長……………」

異物を見るかのような眼で、キザマロはルナに対して助言を乞うた。それは仕方ないのかもしれないが、あまりにも露骨過ぎた。

「……………キザマロ」

思わずルナはキザマロに怒鳴ろうかとしたが、怖くなるのも分

かっていたために強くはいえなかった。

「い、いっちょ俺が背中を叩いてやるぜ」

弱弱しくゴンタもそういうが、彼とてそんな勇氣は出せないだろう。口だけではなんとでもいえるが、実際近づいて叩くのは至難の業だ。

クラスメイトの大半がスバルに近づこうとしない。席の近い人間はどうすればいいかと泣き出しそうにもなっていた。それくらいの感情がスバルの中で渦巻いている。

がたりと、音がした。スバルが立ち上がったのだ。全員が全員びくりと体を揺らす。しかしそんなことを気にすることも無くスバルは教室を出ようとする。

「ど、どこに行くのよ!？」

思わずルナが声を掛けた。それは勇氣というよりも反射というほうが近いかもしれない。ルナもしまった、と心の中で思っていたのだ。彼女も最初から声をかけるつもりはなかった。

その乾いた瞳がルナへと向く。光の無い、闇しか存在しない瞳。それを向けられてルナは思わずたじろいでしまう。

「……屋上」

だがスバルの発したのは一単語だけだった。すぐに教室を出て屋上へと向かっていってしまう。今度こそ誰も止めようとはしなかった。誰も止められるものがいなかった。人間があんなにも感情を捨てられるのだと、思ってしまったから。

スバルは屋上で鉄柵にもたりかかりながらさつきまでと同じように空を見つめていた。周りの迷惑になることだけは分かっていたので気を利かせたつもりでいた。自分のせいで周りの人間が困るのだけは我慢できなかったのだ。

「……………」

数ヶ月前、今とは違った気持ちで同じように空を見つめていたときのことだ。ウォーロックと大吾は流星のように戻ってきた。願っていたから、戻ってきた。キズナのおかげで2人は戻ってきてくれたのだと、あのときにスバルは本気で思っていた。

だから今回も、願えばきつと戻ってきてくれるだろうと。いつも通りの彼の笑顔が見れるだろうと思っていた。ウイルスを倒しに行こうぜとさそってくれると願っていた。

しかしいくら空を見てもウォーロックは戻ってこない。空に見えるのは青く澄んだ空と、白く柔らかな雲、それと白銀に輝く太陽だけだ。

今オックスやハーブ、WAXAなどが探してくれていることはスバルも知っていた。だがそれでも見つからないのは、FM星に帰ってしまったからではないかと近頃スバルは考えていた。もう自分とられないと思い、故郷へと帰ることは有り得る。

たった一つの敗北のせいだ。たった一つの、しかも死人さえ出ていない負けのせいだ。しかしそれがウォーロックにとっては重かったのだろう。負けてはいけないものだったのだろう。生きていればいい、他人が傷つかなければそれで伊と思っているスバルとは違うのだろう。

敗北か、負けに対してのペナルティ、そのどちらを重く見るかが2人の違いだった。似ているようで違う。結局2人は同じ思想の持ち主ではなかった。そうとは知っていたが今まで意識していなかったのだ。

「……ウォーロック」

空っぽのハンターの重みを感じながら、相棒の名を呼ぶ。返事は無い。装着されたアダプターにはエンブレムもなくなってしまった。ただの空虚なハンター。スパルと同じで、何も無い物体。

「何で出て行ってしまったんだよ」

そのとき、ようやくスパルの顔に感情というものが現れた。それは涙だ。1つ流れたかと思うと、3つ4つと数をどんどん増していく。

「何でだようう」

その程度のキズナだったのかと。その程度の間柄だったのかと。問わずにはいられない。確かめずには要られない。今はいない相棒へと。

「戻ってくれなきゃ、寂しいよ」

相棒のいない英雄は、あまりにも弱弱しく、あまりにも脆すぎた。おもちゃを取り上げられてしまったように、スパルは何をするわけでもなく、呆然と空を見る。空はこんなにも綺麗で、澄んでいるのにも関わらず、少年の心1つ晴らすことは出来ない。

「何があつたの？」

そう訊いてきたのが誰なのか、最初は誰か分からなかったのだ。驚きによって振り返ってみると、そこには黒髪の、優しい顔立ち

をした男の子が立っていた。

そういえば、新しいクラスの人だっけ？

今更だがスバルたちは始業式をはじめ、クラス替えをした。スバル達4人組は一緒　ルナの仕事がはかどるようになって　のクラスになっていた。またカイという銀髪の少年も一緒のクラスであったのはスバルも覚えていた。けれど黒髪の少年は思い出せない。そこまで目立つような人間でもなかった。

「……………誰ですか？」

今までほとんど他人を無視してきたスバルが、初めてまともな応対をした。それを見て少しだけ表情を和らげると、黒髪の少年は自己紹介をした。

「宇宙銀河ソラギンガっていうんだ。君のクラスメイト」

「……………何のようですか？」

ここでスバルに声を掛けてくる理由が分からなかった。彼とはまともに話したこともない。故に心配される道理も無いと思っていた。

「君が、さっきから酷い顔をしているからさ。何かあったのかと思っ
つて」

「……………君には関係ないでしょ？」

「同じクラスメイトじゃないか。そんなこといわないでよ」

まだ新しくなって一週間もたっていないのに、何を言っているのかとスバルは思った。普通始業式が始まってから落ち込んだ人間がいれば、誰も相手をしないのに。それともルナと同じく委員長になりたくて票集めをするつもりだろうか。

「……僕はね、趣味が人助けなんだ」
「どこのヒーローだよ」

思わずスバルは嘲笑いそうになってしまいそうになった。そんな人間なんて、実在は 自分がそうではないか？ スバルの思考がばらばらになってしまいそうになる。

「そうだよね、おかしいよね」

照れて笑う少年は、しかし嘘で言っているようではなかった。本当に彼の趣味は人助けなのかもしれない。

気づけば銀河はスバルの隣へと来ていた。しかしスバルはそれを拒もうとはしなかった。拒むよりも銀河と話したいと、何故か思っていたのだ。それが何故なのかは分からない。

「……僕は他人が悲しんでいる顔を見ると、辛くなるんだ」
「何で？」

「君だってそうだろう？ 他人が悲しい顔をしていると自分も辛くなる。でもたいていの人はそれから目を反らしてしまうんだ。以前の僕もそうだった」

「……………」
「でも僕は変わったんだ。ロックマンに出会って」

その単語を聞いて、思わずスバルは眼を見開いた。ここで自分の話題が出るとは思わなかったのだ。銀河は自分の正体を知っている！？ 大きすぎる疑問のせいで声が上手く出ない。けれど銀河はそのことについては触れなかった。

「僕は、メテオGの事件のときに、スピカモールにいたんだ。ほら、一時期ノイズドウィザードが各地で大量に暴れたときがあったじゃ

ん。そのときに僕は両親と出かけていたんだよ」

それはスバルも覚えている。他でもないスバル本人が解決したことなのだ、忘れるわけが無い。

「それで、僕達は暴走したウィザードに襲われたんだ。そのときは本当に怖かったんだ。……僕も、両親も死んじゃうかと思っていた。でもね、そのときロックマンが助けてくれたんだ。まるで、流星みたいに見れてさ」

けれどスバルはそこまで詳細には覚えていなかった。助けた人間1人1人の顔までは覚えていない。あのときは無尽蔵に現れるウィザードを倒すのに必死だったのだ。

「そのとき僕は嬉しかったんだよ。彼に命を助けられて。また生きられるんだって思えて」

「……………」

「だから、僕はそのときからロックマンみたいに誰かを助けられるなら助けようって思い始めたんだ。彼みたいに力は強くないけど、弱虫だけだ」

自分の手によって救われて、自分のようになるとする。それはとても嬉しくて、けれど残念だった。自分が、残念で仕方なかった。こんな人もいてくれるのに、自分は今泣くことしか出来ないのだと。

「だからさ、何かあったら僕に相談してよ。出来る限り力になるからさ」

こんなにも優しい人間に憧れているのに、今の自分は嘆くことしか出来ないのだと。

「僕は」

気づけばスバルは口を動かしていた。

「僕は、大切な友達と喧嘩しちゃったんだ」

銀河に何かを求めていたのかもしれない。救いか、それとも慰めか。心の救済か。

「友達は、もうずっと帰ってこないんだ」

「……それは、君のウィザード？」

こくりとスバルは頷いた。銀河はその話を聞いてゆっくりと頭の中で整理する。

「いつか帰ってくるよ」

帰ってきたのは、誰もが言える言葉だった。

「いつか、ひょっこりと帰って来るよ」

その答えに、思わずスバルは激怒しそうになる。責任を持ってそんなことを言ってくれ。軽々しくそんなことを言わないでくれ。次々に言葉が生まれ、それを一気に言おうかと思いい口を開けて

「だって、きつとキズナが深いから」

「あつ……えつ………？」

「君は、大喧嘩をしたことがないのか。だから分からないのかもしれないけど、そんなものだよ。友達との喧嘩なんて。僕だって3ヶ

月間絶交していたことあるし」

朗らかに笑う彼の眼は、やはり嘘を言っているようには見えなかった。

「だからさ、君はその友達が帰ってこれるように状況を整えるべきだよ。それが今君に出来ること」

「……………」

「喧嘩したからって、すぐに仲直りしようとするのはいいことじゃない。むしろ、これから生きるならそういう時期も大切だよ。これからも、一緒に生きていくんだからさ」

「僕は、君なら出来ると思うよ。スバル君」

11th He Want to be a HERO・(後書き)

感想待ってます。

12th A boy is walking there .

屋上から去っていったスバルから遅れ数分、ギンガも自らの教室へと向かっていた。困っていた人を助ける、そんな馬鹿げたことを罵られることを、彼は自分出来る範囲でいつも行っていた。

「何やっていたんだ？ おまえが屋上に行くなんてどんな風の吹き回しだよ」

教室に入るやいなや、最後列に座っている少年がギンガに話しかける。あまりにも遠慮ないその口調に内心苦笑しながら、ギンガはその少年を見る。

小学生にしてはやや高い身長と白雪を思わせる銀髪、それでいて周りの人間を威圧する瞳。それがギンガの友人であるカイという少年の容貌だ。

「なんで屋上にいつているって分かったんだい？ まさか隠れて僕を尾行していたの？」

「いやさ、俺のウィザードがいつも通りに風を浴びに行ったら、おまえを見かけたらしいって。何でも女みたいな男を慰めていたから、ホモなんじゃないかっていったぞ？」

カイは意地悪く笑みを浮かべる。だがギンガはその程度では怒ったりはしない。カイとは長い付き合いだ。こんなことで喧嘩したりしていたら毎日喧嘩だろう。

「女の子みたいな顔してたってのは本当だけど……気をつけなよ？ ここ本人がいるんだからさ」

「大丈夫、面と向かっては言わないさ」

ひらひらと手を振る彼の顔はいつもこんな感じだ。その性格からカイの他人からの評価は二分される、「嫌い」か「近づきたくない」からだ。

友人としてどうにかその性格を矯正してあげたいとは常々考えてはいるのだが、どうやってもカイは直らない。地獄に落ちてもこの人を馬鹿にしたような友人は性格を曲げたりはしないのだろうと、ギンガはそう諦めている。

「んで、どうだった？ 星河スバルは」

本題だとばかりにカイはさらに笑みを深くした。結局カイが話しかけてきたのはその話題のためだけだ。いつもならカイはギンガがどこ行こうが何もいわない。カイとギンガが喋るときはそう多くない。カイが本当に興味のある話題が存在するときだけ、会話する。いささか変わった友人関係だ。

「あれはロックマンなのか？」

「……………別に僕はロックマンが調べるために話したわけではないからね」

話題が話題だけに2人とも声が小さくなる。噂だけにとどまっているそれを、そう他人に聞かれることはあまり好ましくなかった。それが真実であればおおっぴらに喋る気である人間は、ギンガの目の前にいるが。

「僕にはそう見えなかったな。なんだか、普通に悩みがある少年って感じ」

「それでも何かなかったのか？ そういうのすぐ気づくだろ、おまえ」

「あのね、人を警察官か何かと勘違いしていない？ ……………どう
ちにしろ分らないよ。僕からしてみれば、ね」

「俺からしてみても分らないからおまえに訊いているんだろうが」

残念だ、とカイは大きさに溜め息をついた。だったら自分でなんと
かしてこい、とギンガは言いたかったが、カイが自分の性格から
してそんなことは無理だろうと分かっていたので言わなかった。

「まあそうだよな。そんな簡単に分かるわけないよなあー」

「でも逆になんでスバル君にそんな噂が流れているんだろう。僕は
それが気になるよ」

「去年のうちの卒業生にいたんだってよ、この学校でロックマンを
見た奴が。科学部の部長じゃなかったっけ？」

「ああ、なんかロケットが暴れたときに？」

「そこまで詳しくは知らないけどさ、とにかく数ヶ月前だよ、そん
な噂が流れたのは」

数ヶ月前のコダマ小学校はそれはそれは大荒れだった。科学部が
総力を挙げて作ったロケットは暴れるわ、生徒会選挙で電波体が暴
れるわ、その裏で職員室の上に位置する教室には大穴が空いていた
りと、もはや失笑レベルの惨状だった。

「……………じゃあ別にこの生徒ってわけでもないんじゃないの？」

「なんでだ？ 普通ここの生徒だって思うだろうが。それに知って
いるだろう？ おまえだってレゾンに入力したはずだ。スバルって
名前を」

「そうだね。でも僕はそうは思えないんだ。だって」

僕を救ってくれたロックマンは、あんな脆く儂げな顔をする
ような人ではなかったから。

「…………ふうん。そりやまた適当な理由で」

どこかしらカイは不満気だ。スバルがロックマンではないということが、それほど残念がる理由をギンガは知らない。

何故そこまでロックマンにこだわるのかを何度か訊こうとした。カイはあまり他人に興味を示さない。おそらく星河スバルに噂さえ流れていれば話しかけようとしなかっただろう。なのに噂があっただけでこれだ。

しかしギンガは訊かなかった。訊いた所でカイがはぐらかすことは予測がつき、さらに彼自身そんなことに深く興味が無かった。

この2人はただ、話し相手がいればいい奴らだ。それが誰だろうとかまわない。ブラザーとさえいええない2人。だから彼らはブラザーバンドを結んでいない。結ぶほど強固なキズナなど、彼らには最初から皆無だった。

「ま、分かったこともあるし今回はこれでいいや」

そこでカイはギンガから視線をはずした。これでカイとの会話は終わりという合図だ。いささか味気ない終わりかたがカイとギンガの会話だ。

授業開始五分前の予鈴が鳴った。それを聞いてギンガも自分の席に座ろうとする。

「　　そういやよ」

振り向けば会話を終えたはずのカイがギンガへと視線を向けている。

「なんであいつは悩んでたんだ？」

「……………ウィザードがいなくなっただって」

少々驚きながらもギンガは答える。

「それ、本当か？」

カイはその答えを本気で疑っているのか、声がすごんでいる。

「俺、あいつのウィザードを見たことがあるぞ？」

放課後、ギンガが行動しようと思ったのは単なる正義感だった。誰かに救ってもらったのだから、自分も誰かを救いたいという欲求があった。

もとより彼は普通の人間だ。ロックマンと違って何の力も無い。ただの小学生でしかない。彼のウィザードも、平均的な力しか持ち合わせていなかった。

「だっていつでもねえ……………」

救いたいのだから仕方ない。憧れてしまったのだから諦めるしかなかった。無論彼は自分の命を最優先にしている。命が危なくなりそうなことはしないつもりだし、近年崩壊寸前といわれる廃墟にも入ろうとは思わない。

そう、そこに目当てのものがあっても、躊躇するくらいの人間らしさを持っている。

眼前の朽ち果てた建物はからは人間の住んでいる気配はない。今

すぐに倒壊してしまい、ただの平地になってしまいそんな予感もある。

「この町の外れのほうこうに飛んでいったのを見たぜ」

カイのその一言でギンガはここまで来てしまっていた。彼は特に習い事をしているわけでもないため、別にここに来ることは難しくも無かった。親には寂れた廃墟に行くとは言わず、友達と遊んでくるとだけ伝えておいた。

「ここに本当にいるのかな」

隠れるにはたしかにうつてつけの場所ではある。人が住めるような場所ではないが、電波体が住む分にはなんの不便も無いだろう。たしかにここにいる可能性はある。

けれど家出したウィザードだ。何日もここに住んでいるだろうか？ 放浪するならともかく、わかる。遠くに行きたい、その心は理解できる。だがこんな中途半端な場所に住む必要があるのだろうか？

「それともスバルくんに探し当ててもらえるまで待っているのかな？」

しかしこんな寂れたところを探すならもつと他の場所を探すだろう。カイのように目撃証言があればいいが、それでも多くの人間が見たというわけではなかった。実際カイの帰り道を通る人に訊いて見たが、見た人は1人もいなかった。

「ああ、でも」

スバルのウィザードがいつ家出したのかを聞いていなかった。家

出する前にカイが見ていたとするならば、ここではなくその先の公園にでも向かっている途中かもしれない。

「……結局分らないじゃないか」

入ろうかどうかさつきから迷っているのだが、いまだにその決心がつかない。入ろうとする勇気が彼にはまだ足りなかった。だからこそそいつは言ったのかもしれない。

《入ってきなよ》

その廃墟の中から、声が響いてくる。

《別に怖がることはないさ。死ぬわけじゃない》

声から相手がどんな表情をしているのかは読み取ることが出来ない。ただ冷淡に誘うだけ。

「……………」

相手が誰なのかは分からない。けれどこれがどれほど異常な事態なのかは分かっている。

従う必要など無い。言うとおりにすればどうなるかなんて、ギンが自身予想がついていた。

けれど

彼は歩いてしまった。

ただの正義感で。バカみたいな恩返しという気持ちで。その身がどうなるのかも知らずに、ギンガは歩いてしまった。

13th What missing

「……………で、あなたも探すの？」

「うん、そうしたい。僕もみんなに任せっきりじゃ悪いし」

翌日学校に登校したスバルはルナにそう告げた。彼女も昨日の落ち込んだときはどうなるものかと思ったのだが、しかし今日見たスバルの表情に安堵した。まだ悲しみの余韻は消えてはいないものの、それでも活力に満ちている。

未だ行方の分からないウォーロック、ハープやオックスなどが数日探しても見つからないことから、コダマタウンから遠く離れた場所にいるのではないかという考えが多くを占めていた。もちろん2体のウィザードが探していない場所がある可能性もあるが、ほとんどない。ハープとオックスが探していないのは他人の家が、それとノイズウェーブくらいなのだから。

ノイズウェーブにはWAXAの調査隊が探索している。もちろん彼らもウォーロックを探す意味がある。いつまた大きな危機が訪れるか分からない情勢では、ロックマンという存在は必要不可欠なのだ。だから総力を挙げて探索している。

「ならいいわ。あなたも昨日みたいに落ち込まないでね」

心配性なルナのためか、少し脱力したように見える。生徒会長になった彼女はただでさえ多忙なのだ。それに加え友人の悩み事を背負ってしまったては、過労で倒れてしまいかねない。

「ごめん、委員長。迷惑かけて」

「そのくらいわ大丈夫よ。他でもないスバル君のことだもの。気にかけないほうが無理だわ」

これがルナルナ団の強みといったところか。人間らしさを持っている。無理して自分ひとりで背負うのではなく、周りに助けてもらう。無理して背負おうとしている人間がいるのであれば肩代わりしてあげる。実に好ましい友人関係だ。

「それにしてもスバルって昨日何かあったのか？ 牛丼を食べて気持ちが悪くなったのか？」

「違いますよゴンタ君。そんなわけないじゃないですか。……………とはいったものの僕も気になりますね、昨日何かあったのですか？」

ゴンタとキザマロはそのことに興味があるのか、ずとスバルに身を寄せてくる。たしかにスバルの傷は一晩でなんとか癒えるものではなかった。下手したらまた家に閉じこもってしまうのではないかと懸念されたくないのだ。

「……………嬉しいことをいつてくれた人がいてね。僕はそれに勇気を貰ったんだ」

照れくさくなりながらも、スバルは言った。さすがにロックマンである自分のことを凄いといってくれた人がいたとは中々言えなかった。それでも昨日のことを思い出せば、胸が温かくなる。

「だからそんな人がいるなら、僕も頑張らなくちゃいけないなって」

「ヘエ、スバル君に勇気を与えた人ですか」

「なんか珍しいな。スバルはどちらかといえば拳げる人だっと思ってたんだけど」

「ゴンタ君が珍しく正鵠を射ていますね」

「せいこくってなんだ？ 鳥か？」

「鳥という感じはたしかに入っていますですが違います」

その、いつも通りの日常。けれどまだ欠けてしまっているものがある。どこにいるかも知れない相棒、それがいればもっとこの状況が楽しく感じられたはずなのだ。

「それでスバル君。あなた、明日から学校を休むつもりなの？」

ルナは当然だとばかりに質問した。当然無断欠席など許せない立場である彼女はきちんと訊いておかなければいけない。

「……………うん、そうするつもりだよ。学校にいる時間も使って、僕は探そうと思う」

「それを私が許すと思うの？」

もちろんスバルとてルナがすぐに許してくれるとは思っていないかった。探すといっても放課後だ、といわれてもおかしくなどない。なのでここは頼み込むしかなかった。

「委員長、お願いだから」

「許すに決まっているでしょう、バカ

」！

昼休み中であるコダマ小学校に生徒会長の怒号が轟く。壁が、天井が、窓が、その怒りの波動によって揺れ動かされた。

「私だって鬼じゃないんだから、ちゃんとそのくらいのことは許可するわ。先生だって分かってくれるだろうし、止められるなんて思わないで」

「……………委員長」

規律よりもキズナ、ルナとてどちらに天秤が傾いているかくらい心得ている。

「その代わり！　ちゃんとウォーロックを連れ戻してくるのよつ。学校休んで連れて帰れませんでした、じゃ意味なんてないんだからね！」

「うん、ちゃんと連れて帰ってくる」

今更ながらだが、スバルはこの仲間達に感謝した。自分の意見を尊重してくれる、ブラザー。こんないい関係なんておそらく世界中を差が射てもないだろうと、感じられる。

「　悪い、うるさい」

……………そんな空気を壊す人物が一人。この教室には存在していた。

スバルたちが話していた場所から五メートル先くらいにそれはいた。昼寝をしていたのか、目にはかすかな涙と口元にはよだれ。そんな少年がルナを忌々しげに見ている。

「生徒会長。喋るのは勝手だけど周りの人間のことも考えろ。おまえみたいな奴がきゃんきゃん騒ぐと普通の人間は眠れないんだよ。そこのところ察してくれ」

その少年の名前をカイという。学校では有名人だ。しかも飛び切りの。

「あゝらごめんなさい。耳がよろしいカイくんの睡眠を妨害してしまつて」

それに対しルナは謝ることなく強気だ。それは2人の相性がこれ異常なく最悪だということにつきるだろう。

カイが有名なのはあのルナに唯一抗う人間だということだ。ルナが生徒会長になってからは争いも激化、校内では度々彼らの言い争いが見られるという。

なのでこの風景も日常と化してしまっていた。

「ドリルみたいなのは髪型だけじゃないってか？　口からは騒音を吐き出すとかどんどん機械かしていくな、おまえ。もしかしておまえの前世ってドリル？」

「あなたってバカね。そんなわけないじゃない。あなたの前世は犬かもしれないけど」

「犬なわけねえだろうが」

こんなたわいもない会話が毎日行われては「あいつらもしかして仲良しなんじゃね？」という噂があるが悲しいかな、本当に彼らの中は仲が悪い。犬猿の仲よりも酷い。ある人曰く「地球と二酸化炭素」。周りの人間に被害を与えるからだとか。

どちらも気が強いというのが最大の原因だというのが多くの人間の認識だが、「白金は他の奴とぶつかったほうが成長するだろうな」という教師の考えのせいでこうなった。その事情を知るのは生徒ではないいため、この2人の喧嘩は運が悪かったとしか思っていない。

「……………2人とも元気だね」

「ああ、委員長もさることながらカイ君も負けず劣らず元気です。普段だるそうなのに凄いですよね」

「あいつ、きつと焼肉で力を補っているんだよ」

「ゴンタ君はいつまで肉にこだわっているんですか？」

その喧嘩の様子を見て彼らが抱く感想もいつも通りだった。ただ、違うとすれば

『俺も誰かと喧嘩してえな!』

そんな声が聞こえないくらいだ。

14th Parallel World

放課後になり、空も茜色に染まってきていた。小学生は集団で帰宅するようにいわれており、今日も多くの児童はグループを作って帰路についている。

『ブロロ、すまねえスバル。今日もウォーロックを見つけることが出来なかった』

いつもならノズルから強い火を噴いているオックスだが、このごろは火力も弱いように見えた。普段はいがみあっているが、仲間であるウィザードが消えてしまったのだ。無理からぬことだろう。

「いや、大丈夫だよオックス。そんなに落ち込まないで」

『ブロロ、だが』

「ウォーロックも結構上手に隠れているんだよ、きっと。今度は僕も探すからさ、一緒にがんばろう」

ルナルナ団一行はこのごろウォーロックの件でしか会話をしていなかった。オックスや、今は不在のハーブが探した場所を地図に書き記しながらコダマタウンではどこを探していないかをチェックする。

けれどそれもそろそろ終わってしまいそうだ。コダマタウンではほぼ調べつくしてしまった。その結果もちろんウォーロックは見つかっておらず、もうコダマタウンにはいない可能性のほうが強かった。

「スバルもこういつているんだ。気にするなよオックス。牛丼食おうぜ？」

『ブロロロ、面目ねえ』

牛井というワードに反応しないくらい今のオックスは落ち込んでいる。その事実にとれだけオックスが本気で探していたのかが分かるだろう。普段の彼なら牛井と聞けばすぐに上機嫌だ。

「しかし、どこにいますんでしょね。ここまでくると本当に遠い場所ではあり得ない気がします」

「キザマロの言うとおりだね。だから………僕も遠くを探そうと思う」

もちろんWAXAが探してくれている地域を除いて、だ。そんなところなどないのではないかと思われるが、さすがに私有地には無理がある。それもウォーロックの周波数を隠す通せる場所となれば、大きな会社か何かでしかない。

『可能性からして、どこかの研究所かもしれないね』

「ペディア、それは何%です？」

『うーん……………34%くらいとしか』

ウォーロックがどこに隠れそうなのは、ウィザードであるのだからすぐに判断がつきそうなものかもしれない。人間にもある程度のパターンがあり『こんな状況にはこうしやすい』などというのがある。ウィザードもその例外には漏れない。

しかしウォーロックはその例外であってしまっただけ。あの短絡思考と思われていたウォーロックはWAXAの試算の裏をかくて行動していることになる。

「ペディアの計算でそれか……………間違いないのだから、なんともいえないわね」

こういつときルナもよく討論に参加し、よい方向へと導いてくれることが多い。しかし今回ばかりは彼女にも荷が勝ちすぎた。行方湯名になったウィザードを探した経験など彼女にはない。推定でしか答えをいえないのが現状だ。

もちろんそれでもルナの意見はいい材料になる。その一つとしてウォーロックはあえて人目の着く場所にいるのではないかということだ。

スバル達から探すことが難しければどこでもいいはずなのだ。たとえばスバルたち小学生では行きにくいどこかの一流企業など。隠れる場所があればそこには監視の目を向けられないため隠し通すことは出来る。

『でもルナちゃん、今の一流企業はそんな簡単にウィザードに入らせてしまうのですか？』

そんな極当たり前な質問をしたのは彼女のウィザード・モードだ。

「そう、そこも問題ねえ。……………でも、会社じゃない可能性だってあるわ」

『でも、それだって難しいはずです。WAXAだって全国に監視の目を向けられます。大まかな監視になってしまいますが、それでもほとんどの場所を監視できるんです。そんな国家権力でさえも監視できない場所なんて、あるのでしょうか？』

『僕の計算からして、そんな場所は数少ないけど、ウォーロックじやあまず入れないだろうね』

2体のウィザードの意見はもつともだ。国家権力でさえも監視できない場所を、はぐれウィザード一匹が入ることなど出来るはずがない。いくらウォーロックが強くてそれもそれに代わりなどない。

「じゃ、じゃああなたたちはどこだと思うのよ。そんな簡単に見つけられない場所なら、二ホンにないことなんてあるわ」

スカイウェーブを使えばたしかに世界に行くことも出来るが、だがそれもWAXAの目にひっかかる。必然的にウォーロックは国内にいることになるのだ。スカイウェーブの他にも海外に行くことが出来る経路はいくつかあるが、それもやはりウィザード一匹では無理な話だ。

『うーん、それは……………』

『僕にも分からない。計算式を組み立てることさえ出来ないよ』

ここで議論は一度止まってしまった。最初から小学生が集まっている議論などではなかったのかもしれない。あまりにも彼らは心身を削ってウォーロックを探すことに躍起になっているが、やはりサテラポリスに任せることが一番なのには変わりない。

だが彼らはサテラポリスでは見つけれられないという、半ば直感めいたことがあったのだ。それは何故か分からない。ただここ何日も見つからないことから考えて、ウォーロックはただ隠れていないことだけは分かる。

「……………なんで僕の元からいなくなった、か」

結局はそこに行き着く。ウォーロックがいなくなったのは偏にスバルが弱かったからに他ならない。スバルがもっと強ければこんなことにはおそらくなかっただろう。

自分が強ければ、自分が強ければ、自分が強ければ　そう思わずにはられない。

過去へ戻る切符などは存在しない。だからこんなことを考えても

仕方ないのだ。だが誰もが大きな失敗をしでかしたときに思わずにはいられない。過去に戻れば。あるいはこう考える人もいるかもしれない、他の可能性があれば、と。

「何を、考えているんだ」

他の可能性、つまりパラレルワールドやその説だが、そんなものなど存在しない。存在したとしてそれは平行なのだ。交わることなく決してない。この世界のスバルには関係のない話だ。

それを期待してどうするのか。何か意味があるのか。パラレルワールドを渡り歩くことが出来る道具が手に入るのか？

そんなわけがない。そんな道具もないし、スバルには関係のない話。全く意味のない思考。

疲れているのかもしれない。ギンガとの会話で気持ちは楽になったが、それでも疲れが溜まっているのはやはり変わらないだろう。

「今日は、早く眠っちゃおう」

そうすれば明日は気持ちよく朝を迎えられるだろう。そう考えたとき、スバルの背中に悪寒が走った。

「なっ……………」

悪寒を感じたのはゴンタも同じだった。どちらも戦場を身をおいていただけあり敵からの殺気には敏感なのだ。

そう、敵だ。ここ数ヶ月は感じなかった殺気、存在することなかった、存在しないことを願った敵。それが今10メートル先のウエーブロードに立っていた。

「なに、あれ……………」

ルナやキザマロからすれば奇妙な格好をした人間が空中に浮いているようにしか見えないだろう。だがスバルは額にかけてあったダイゴから貰った道具を使いそれがウェーブロードにたっていることを看破した。

敵の姿は白色の無骨な鎧に身を包んでいた。バイザーは赤色で右手には銀色の長槍を握っている。身長は160センチくらいだろうか。中学生くらいの身長の場合は、嘗め回すようにスバルたちを見つめている。

「っ、スバル……………」

「うん、あれは……………」

敵だ。言わなくてもいいことを口にしそうになる。しかし言わずにはいられない。何故ならそれはすぐに攻撃を仕掛けてこなかった。まるでスバル達が仕掛けてくるのを待っているように。

敵はゆっくりと背を向けて、どこかへと跳躍していった。それが逃亡でなく挑発であることは、スバルとゴンタは嫌というほどに理解した。

「委員長、キザマロ、あれは敵だ。2人は逃げ」

「それを言うならおめえもだ、スバル」

瞬間、険しい顔をしてゴンタが何を言ったのかをスバルは理解することが出来なかった。何故非戦闘員であるルナやキザマロだけでなく、自分までもが逃げなくてはいけないのか分からなかった。

「…………ウオーロックがない以上、あなたも戦えないからよ」

ルナもようやく得心いったのか、スバルの手を引いている。しか

し思考はまだ追いついていなかった。

「オックス、行くぞ」

『ブロロロ、任せておけ。さっきは落ち込んでいたが、戦うことはバッチリだぜ』

そういつて彼らはハンタを操作して、ある言葉を紡ぎだす。

「トランスコード オックス・ファイア！」

一瞬にしてゴンタの体は電波変身し、巨大な雄牛をモデルにした紅き猛牛が出現した。

「じゃあなスバル、委員長とキザマロを、安全な場所まで連れて行つてくれ」

そういつてゴンタが敵を追いかけるのを、黙って見届けることしかスバルには出来なかった。

キズナも失い、さらに戦う力も失ったことを、彼の能は理解することを拒んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067v/>

蒼き流星 大地の恵み

2011年11月30日18時52分発行